

2016年度

「学生による授業評価アンケート」
報告書

2017年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立教大学

2017年 9月

はじめに

総長 吉岡 知哉

立教大学の授業評価アンケートの最大の特徴は、そこにフィードバックのプロセスが組み込まれていることにあります。1. 選択肢による定型的なアンケートに加え、「記述による評価」欄を設けて学生の直接的な意見を反映させていること、2. アンケート結果をただ集計するだけではなく、結果に対する個々の教員の所見を求めていること、3. 所見票を全学の学生・教職員に公開していること、そして4. 各学部ごとの総評が報告書の形でまとめられていること。授業評価アンケートの「進化」を生み出してきたのも、このフィードバックのメカニズムにほかなりません。

授業評価アンケートでは、基本的に「一教員一科目」という方針を取ってきました。もとよりこれは、このアンケートが教員の授業力向上のための一施策として始められたという事情を反映しています。授業評価アンケートは、教員による授業方法の自己チェックに資することを第一の目的としていたのです。

けれども同時に注目しておくべき点は、本アンケートが質問項目として、学生自身の授業への取り組み方、学生が授業から得ることができたものを問うていることです。このことは、「学生による授業評価アンケート」が、授業を、教員からの一方向的な知識や技術の伝達としてではなく、教員と学生との相互的な関係において捉えようとする考え方に支えられていることを示しています。

FD と略される概念が高等教育に導入された当初、一部ではパワーポイントをはじめとする情報ツールの使用能力など、問題を教員の技能評価に還元される傾向も見られました。そのような理解は、一方で学生を顧客と見なす教育＝サービス論と、他方で学生を製品とみなす品質管理論と適度に親和しつつ、一定の広がりを見たと言えるでしょうが、本学の FD 推進は、そのような流行とは無縁に、授業を教育の一環として捉えるという基本姿勢を貫いてきたのです。

授業評価アンケートの「進化」は、授業を教育の一環として捉えるという、まさにこの点において生じています。それぞれの学部がアンケート対象となる科目を独自に選定するとともに、「学部等による設問」を別個に設定することを通じて、アンケートの結果は、個々の教員の自己チェックを超えて、授業やカリキュラムのあり方の検討のための素材を提供するという役割をも果たしつつあります。

言うまでもなく、授業は、教育という人間の営みの最前線にあつて、生身の知性が激しく接触する現場にほかなりません。それに対して授業評価アンケートの結果は常に過去に過ぎない。それにもかかわらず、否、それだからこそ、私たちはそこに表れた数字や言葉から、それらに還元されない何ものかを読み取ろうとします。その努力が、授業そのものを活性化させていくに違いありません。

本報告書が、教職員はもとより多くの人々、とりわけ授業の最も重要な当事者である学生の皆さんに読まれることを期待しています。

目次

はじめに

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
1-5 回答結果の全学的な活用に向けて	5
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 各学部等の科目選定方針	11
2-4 実施科目数	11
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	12
2-7 「所見票」の公開	12
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	13
3-1 科目担当者	13
3-2 学部等	13
4. 学部等総評	19
4-1 文学部	20
4-2 経済学部	23
4-3 理学部	26
4-4 社会学部	29
4-5 法学部	32
4-6 経営学部	35
4-7 異文化コミュニケーション学部	39
4-8 観光学部	42
4-9 コミュニティ福祉学部	45
4-10 現代心理学部	49
4-11 全学共通カリキュラム運営センター	52
4-12 学校・社会教育講座	58
5. 2016年度のまとめと今後の展望	61
6. 2016年度集計データ（資料編）	67
6-1 回答者数・回答率	67
6-2 全学集計	68
6-3 学部等別平均値	72
6-4 「グループ集計」科目一覧	84

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における「学生による授業評価アンケート」は、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを旨として改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1-1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票（とその集成である所見集）に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した (p.16 参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが1冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次のアンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004年度報告書より転載)

1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は2004年度にスタートし、2006年度までの当初3年間は「講義科目を対象に1教員1科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことから明らかである。

2007年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008年度、2009年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、「学生による授業評価アンケート」開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006年度には、「1教員1科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員

が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた（2007年1月25日、部長会）。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議を経て、2009年度の教育改革推進会議（2009年11月19日）において、2010年度以降の基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1教員1科目」の原則による実施は、3年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

基本方針決定以降の、科目選定方針は以下の通りである。2010年度は定められた基本方針に拠って、実施する初年度となり、上記②の「1教員1科目」の原則により実施した。

- ・2010、2013、2016年度：「1教員1科目」
- ・2011、2012、2014、2015年度：「学部等の必要性に応じた選定」

なお、2016年度の各学部等における科目選定方針については、「2-3 各学部等の科目選定方針（p.11）」を参照されたい。

1-5 回答結果の全学的な活用に向けて

本学は、従来、1-1に記載した目的に沿い、「学生による授業評価アンケート」の集計結果を教員個人の授業改善や、学部等によるFDの基礎資料として活用してきた。しかし、回答データを計量分析し、全学的なFDに活用するには至っていなかった。

そこで、2012年度10月に発足した大学教育開発・支援センター教学IR部会では、直近において「1教員1科目」を対象に実施した2013年度の回答データを用いた分析を2015年度に実施し、「教員の授業に対する工夫や努力、たとえば、各回の授業内容を明確に提示するよう意識するなどの取り組みによって、学生の授業や学習に対する意欲は高められる」という知見を得、教育改革推進会議を通じて全学へ報告し、共有した（詳細は、2015年度報告書に掲載）。

2017年度においては、優れた教育実践を行う教員を表彰する第1回「立教大学 教育活動特別賞」の選定にあたり、上述の知見を踏まえて、2016年度授業評価アンケートの一部の項目の集計結果が各学部等に提供された。学生がアンケートに回答するにあたり相当な負担を被っていることを肝に命じ、今後もこれまで以上にその結果の活用に努めたい。

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラム運営センターおよび学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から30分間、もしくは授業終了前の30分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

5段階による評価方式の設問を23設問、記述による評価欄を2箇所の構成とした（pp.8-9参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあるが、実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1学部あたり最大で7設問を設定できるようにした。2016年度は、文学部（2設問）、経済学部（6設問）、理学部（4設問）、経営学部（7設問）、現代心理学部（3設問）、全学共通カリキュラム運営センター（6設問）が学部等による設問項目を設定した（p.10参照）。

全学共通カリキュラム運営センターの開設する科目等の表記について

全学共通カリキュラム運営センターの開設する科目は、2016年度入学者より「全学共通科目」として開講しています。

本報告書においては2016年度以降入学者用の名称を用いて記載しています。

<本報告書における表記>

- ① 科目の開設学部等を示す場合 : 「全学共通カリキュラム運営センター」
- ② 開設科目の総称を示す場合 : 「全学共通科目」
- ③ ①または②を略して示す場合 : 「全学共通」

2016年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。
立教大学

(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。
4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 折りまげたり汚したりしないこと。

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード/Course No.	本学学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	(M) (N) (S) (T) (U)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学年 ① ② ③ ④
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	本学学部生以外
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別外国人学生 (Special International Students) (特)
① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別聴講学生 (f-Campus、立教女学院短大など) (聴)
	上記以外 (本学大学院生、科目等履修生など) (他)

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない

〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満		⑤ ④ ③ ② ①
2) この授業に積極的に参加した		⑤ ④ ③ ② ①
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした		⑤ ④ ③ ② ①
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った		⑤ ④ ③ ② ①
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間		⑤ ④ ③ ② ①
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 聞きやすい話し方だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 各回の授業内容の量が適切だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 各回の授業のねらいは明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
4) 各回の授業内容は明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
5) 十分な静粛性が保たれた		⑤ ④ ③ ② ①
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった		⑤ ④ ③ ② ①
7) 板書のしかたが適切だった	該当しない (9)	⑤ ④ ③ ② ①
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	該当しない (9)	⑤ ④ ③ ② ①
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた		⑤ ④ ③ ② ①
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。		
1) 自分にとって新しい考え方・発想		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識		⑤ ④ ③ ② ①
3) 自分で調べ、考える姿勢		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味		⑤ ④ ③ ② ①
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) わかりやすい授業だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業全体の目標が明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 学問的興味をかきたてられた		⑤ ④ ③ ② ①
4) この授業を受けて満足した		⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問

なし

※ 独自の設問を設定した学部等は、その設問が記載される（次ページ参照のこと）。

VI. 記述による評価

みなさん自身が授業をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって記入してください。
みなさんの回答は教員が読み、授業の参考にします。無責任な誹謗や中傷は避け、真摯な態度で回答してください。

1) この授業で良いと思った点があれば書いてください。

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

2) この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

ご協力ありがとうございました

V. 学部等による設問

文学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

経済学部

- 1) (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった
 - 2) (基礎ゼミナール1) 経済文献を読む力がついた
 - 3) (基礎ゼミナール1) レジюмеやレポート作成の力がついた
 - 4) (情報処理系科目※) 表計算ソフト (Excel) の応用力が身についた
 - 5) (情報処理系科目※) Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた
 - 6) (情報処理系科目※) WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた
- ※情報処理系科目とは、以下の科目をさす
情報処理入門 1、経済情報処理 A、政策情報処理 A、財務情報処理 A

理学部

- 1) シラバスに沿って授業が行われた
- 2) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 3) (1年次春学期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 4) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

経営学部

- 1) 倫理観を持ち、自らの言動・価値観を批判的に振り返り行動できた
- 2) 様々な文化背景・生活体験を有する人と、協力して作業できた
- 3) 卒業後も継続して自律的・創造的に研究・調査できる自信がついた
- 4) 経営学の知識や情報を取捨選択し、様々なプロジェクトに活用できた
- 5) 課題を分析し、ビジネス・プロジェクトを論理的に立案し実行できた
- 6) (経営学科) ツールを活用し問題解決のためにリーダーシップを発揮できた
- 7) (国際経営学科) プレゼン、会議、交渉等を英語でも行うことができた

現代心理学部

- 1) この授業の受講者数は適切だった
- 2) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 3) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

全学共通カリキュラム運営センター

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) 【学びの精神のみ対象】 この授業を通して高校と大学の学びの違いを感じた
- 5) 【学びの精神のみ対象】 この授業を通して大学の授業を受ける心構えができた
- 6) この授業の登録方法 (次の中から選んでマークしてください)
⑤ 1次抽選登録 ④ 2次抽選登録 ③ 科目コード登録 ② その他 ① 覚えていない

2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通科目および学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通科目の言語系科目を除外した科目とした。

2016年度は、3年に1度の「1教員1科目」の原則で実施する年度であった。

しかし、各学部等において、「1教員1科目」に加え、学部等の必要性に応じた科目も対象にしたいとの要望が寄せられたので、それらも実施対象とした。

各学部等の科目選定方針の詳細については、「4. 学部等総評」にて確認されたい。

2-4 実施科目数

実施科目数は春学期 893 科目、秋学期 678 科目、合計 1,571 科目であった。

実施予定科目数は、春学期 905 科目、秋学期 684 科目、合計 1,589 科目であったので、全学の実施率（実施科目数/実施予定科目数）は 98.86%（1,571/1,589）、所見票提出率は 82.24%（1,292/1,571）となった。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		春学期	秋学期		春学期	秋学期		春学期	秋学期
文 学 部	256	147	109	254	146	108	215	124	91
経 済 学 部	164	136	28	163	135	28	142	125	17
理 学 部	97	48	49	97	48	49	88	43	45
社 会 学 部	117	63	54	115	62	53	92	53	39
法 学 部	79	40	39	78	40	38	66	34	32
経 営 学 部	107	64	43	105	62	43	67	43	24
異文化コミュニケーション学部	82	47	35	82	47	35	63	34	29
観 光 学 部	85	45	40	83	43	40	68	35	33
コミュニティ福祉学部	119	57	62	119	57	62	98	44	54
現 代 心 理 学 部	80	38	42	77	37	40	62	32	30
全学共通カリキュラム運営センター	332	177	155	327	173	154	269	143	126
学校・社会教育講座	71	43	28	71	43	28	62	35	27
合 計	1,589	905	684	1,571	893	678	1,292	745	547

2-5 実施期間

可能な限り授業が進行した時期に実施することが望ましいとの考えから、2012年度より最終授業週も授業評価アンケートの実施期間とした。アンケートの実施は第1週を原則とし、最終授業週は予備週とした。

春学期：2016年7月6日（水）～7月19日（火）

秋学期：2017年1月7日（土）～1月23日（月）

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、延べ履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	春学期		秋学期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	11,404	7,895	7,282	5,406	18,686	13,301
経 済 学 部	14,947	8,516	3,710	1,851	18,657	10,367
理 学 部	3,628	2,474	3,179	1,953	6,807	4,427
社 会 学 部	10,723	6,363	7,890	4,288	18,613	10,651
法 学 部	8,953	4,226	8,031	3,433	16,984	7,659
経 営 学 部	8,431	4,861	6,799	3,425	15,230	8,286
異文化コミュニケーション学部	1,983	1,530	883	694	2,866	2,224
観 光 学 部	5,942	4,187	5,736	3,904	11,678	8,091
コミュニティ福祉学部	6,010	4,086	6,357	4,230	12,367	8,316
現 代 心 理 学 部	3,739	2,546	3,730	2,467	7,469	5,013
全学共通カリキュラム運営センター	21,038	13,631	18,476	11,776	39,514	25,407
学校・社会教育講座	2,259	1,833	813	689	3,072	2,522
合 計	99,057	62,148	72,886	44,116	171,943	106,264

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、WEB上で学生・教職員（兼任講師含む）に対し閲覧に供している。加えて、「所見集」としてまとめ、池袋図書館および新座図書館においても閲覧に供している。

3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

担当科目の以下の集計結果をアンケート実施1~2ヶ月後に「所見票入力システム」上に掲載し、これらを基に、科目担当者に所見票（p.16 にサンプルを掲載）の執筆を依頼した。

- ・集計結果票（p.15 にサンプルを掲載）
- ・「記述による評価」一覧票
- ・アンケート元データ

3-2 学部等

以下により集計し、2)の結果と科目担当者が執筆した所見票を送付の上、学部等総評の執筆を依頼した。

1) 集計の方針

集計の方針は、以下のとおりとした。

- ①学部等別・学科等別に集計する。
- ②学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計実施の有無は、学部等の判断に委ねる。
- ③科目選定方針が「1 教員 1 科目」である本年度は、全学集計を行うほか、全学部等の設問項目別平均値の一覧表を作成する。

2) 集計内容

①回答者数・回答率

アンケート回答者数を学部等別、学年別に集計した（合計も記載）。また、アンケート実施科目について学部等別の回答率（回答者数/履修者数）を算出した（p.67 参照）。

②平均値に関する集計

平均値に関する集計は、下表のとおり行った。

集計単位 提供した 集計データ	全学	全学部等	学部等別 ^{*1}	学科等別 ^{*1}
設問項目別	● (p.68参照)	● (p.69参照)	● ^{*2} (pp.72・83参照)	●
学年別	● (p.70参照)	—	●	●
授業規模別	● (p.71参照)	—	●	●

*1 学部等には、当該学部の結果を提供

*2 学部等には、設問項目別に回答割合を示した帯グラフも提供

なお、2013年度より、アンケート設問項目の「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については、以下の通り数値を置き換え算出している。

・ I 1) 出席率

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、
「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

・ I 6) 授業時以外に学習した時間

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、
「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

③設問項目間の相関

全設問項目間の相関係数を学部等別、学科等別に算出した。特に「IV4) この授業を受けて満足した」と他の設問項目との関連の強弱を明示した。学部等には、当該学部の結果を提供した。

④グループ集計（実施学部のみ）

グループ内の科目間を比較するデータとして、設問項目ごとの科目別回答割合を示す帯グラフ（p.17 にサンプルを掲載）、科目別平均値一覧表およびレーダーチャート（p.18 にサンプルを掲載）を提供した。

サンプル <科目担当者へ通知する集計結果票>

2016年度春学期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK01	開講曜日	土	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価01	開講時限	4	教室	N212	回答数	56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー	平均
回答者数、()内はパーセント							1から5の数字の平均

*II-7)、8)は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	36 (64%)	15 (27%)	4 (7%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	90.71	*1
2) この授業に積極的に参加した	16 (29%)	20 (36%)	14 (25%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.82	
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8 (14%)	14 (25%)	19 (34%)	9 (16%)	6 (11%)	0	0	3.16	
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7 (13%)	22 (39%)	14 (25%)	10 (18%)	3 (5%)	0	0	3.36	
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	16 (29%)	25 (45%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	3.95	
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	4 (7%)	3 (5%)	7 (13%)	17 (30%)	25 (45%)	0	0	0.72	*2

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	23 (41%)	23 (41%)	9 (16%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.21	
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (25%)	30 (55%)	8 (15%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.00	
3) 各回の授業のねらいは明確だった	17 (30%)	23 (41%)	12 (21%)	2 (4%)	2 (4%)	0	0	3.91	
4) 各回の授業内容は明確だった	17 (30%)	26 (46%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.00	
5) 十分な静粛性が保たれた	42 (75%)	13 (23%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.73	
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19 (34%)	25 (45%)	8 (14%)	4 (7%)	0 (0%)	0	0	4.05	
7) 板書のしかたが適切だった	8 (18%)	14 (31%)	16 (36%)	5 (11%)	2 (4%)	6	5	3.47	
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	6 (13%)	6 (13%)	26 (57%)	3 (7%)	5 (11%)	5	4	3.11	
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	21 (38%)	19 (34%)	10 (18%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.98	

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	22 (39%)	20 (36%)	6 (11%)	8 (14%)	0 (0%)	0	0	4.00	
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22 (40%)	26 (47%)	4 (7%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.22	
3) 自分で調べ、考える姿勢	13 (23%)	21 (38%)	13 (23%)	8 (14%)	1 (2%)	0	0	3.66	
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25 (45%)	23 (42%)	6 (11%)	1 (2%)	0 (0%)	1	0	4.31	

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	25 (45%)	19 (34%)	8 (14%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	
2) 授業全体の目標が明確だった	22 (39%)	21 (38%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.09	
3) 学問的興味をかきたてられた	27 (48%)	14 (25%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.14	
4) この授業を受けて満足した	27 (48%)	15 (27%)	10 (18%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	

*1) 「5:90%以上」=100 「4:70%~89%」=80 「3:50%~69%」=60 「2:30%~49%」=40 「1:30%未満」=20として平均を算出
 *2) 「5:3時間以上」=3.5 「4:2~3時間」=2.5 「3:1~2時間」=1.5 「2:1時間未満」=0.5 「1:0時間」=0として平均を算出

サンプル <科目担当者が執筆する所見票の書式>

2016年度春学期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK01 科目名 授業評価01 開講曜日 土 開講時間 4 担当者 立教 太郎 教室 N212 履修者数 60 回答数 56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー

*「1」は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 授業全体を通じての出席率 (5: 90%以上 4: 70~89% 3: 50~69% 2: 30~49% 1: 30%未満)
- 2) この授業に積極的に参加した
- 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
- 4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした
- 5) シラバス (履修事項の講義内容) は受講に役立った
- 6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (合計して、1週間に 5.3時間以上、4.2~3時間、3.1~2時間、2.1時間未満、1.0時間)

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 聞きやすい話し方だった
- 2) 各回の授業内容の量が適切だった
- 3) 各回の授業のねらいは明確だった
- 4) 各回の授業内容は明確だった
- 5) 十分な精選性が保たれた
- 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった
- 7) 板書のしかたが適切だった
- 8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった
- 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと感じますか。

- 1) 自分にとって新しい考え方・発想
- 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
- 3) 自分で調べ、考える姿勢
- 4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) わかりやすい授業だった
- 2) 授業全体の目標が明確だった
- 3) 学問的興味をかきたてられた
- 4) この授業を受けて満足した

授業評価に対する担当教員の所見

Blank area for the lecturer's comments on the evaluation.

記述による評価に対する担当教員の所見

Blank area for the lecturer's comments on the evaluation by description.

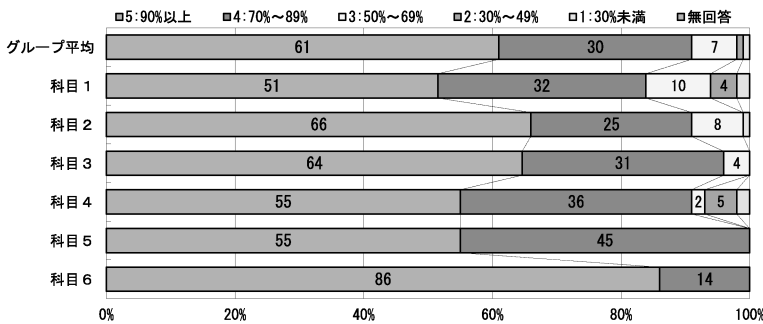
改善に向けた今後の方針

Blank area for the lecturer's future directions for improvement.

サンプル <学部等へ通知するグループ集計結果（実施学部は pp. 84-90 参照）>

1) 設問別帯グラフ (5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 9:該当しない (II-7, II-8のみ) 無回答)

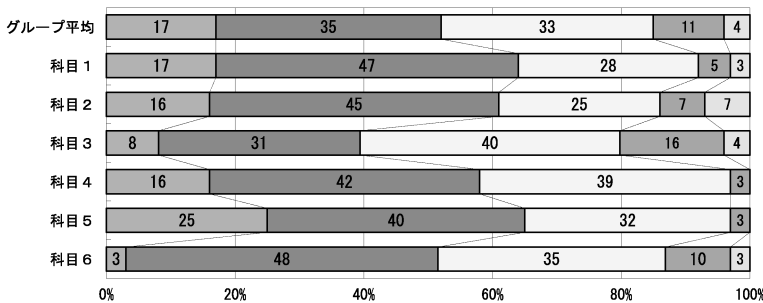
I-1 授業全体を通じての出席率



	回答者数*1	平均*2	無回答
グループ平均	113	94.87	-
科目1	19	96.90	-
科目2	15	96.00	-
科目3	20	95.67	-
科目4	21	97.87	-
科目5	18	86.89	-
科目6	20	92.22	-

*1 「無回答」は除く
*2 I-1の平均値の算出方法は表紙に記載

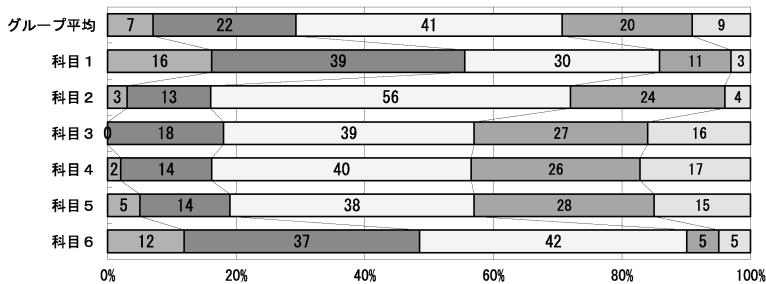
I-2 この授業に積極的に参加した



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.61	-
科目1	18	3.72	-
科目2	15	3.69	-
科目3	20	3.20	-
科目4	21	3.78	-
科目5	18	3.90	-
科目6	20	3.46	-

* 「無回答」は除く

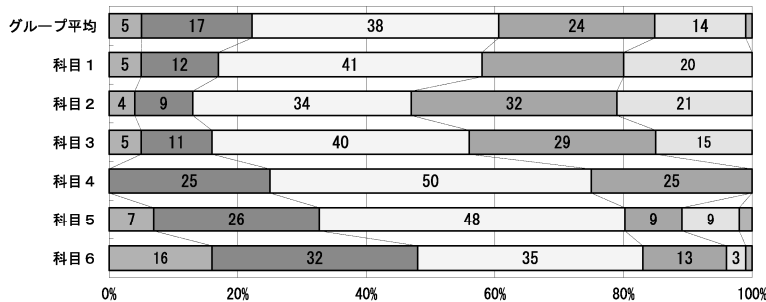
I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.01	-
科目1	19	3.58	-
科目2	15	2.76	-
科目3	20	2.65	-
科目4	21	2.63	-
科目5	18	2.93	-
科目6	20	3.67	-

* 「無回答」は除く

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



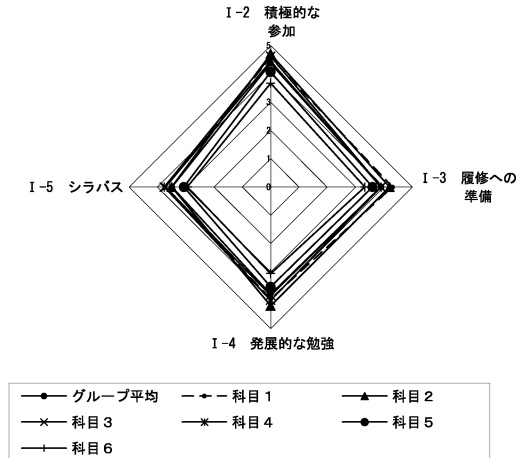
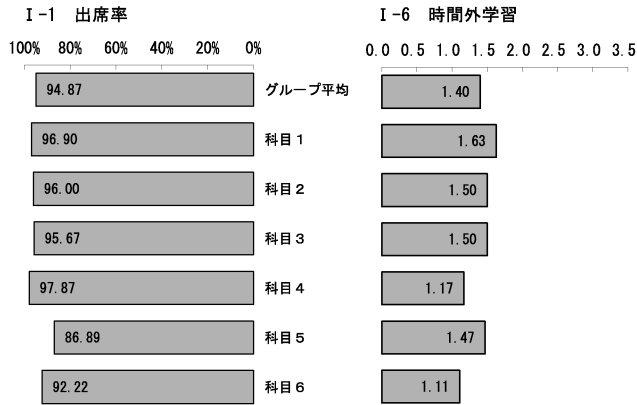
	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	2.98	2
科目1	19	2.60	-
科目2	15	2.42	-
科目3	20	2.67	-
科目4	21	3.09	-
科目5	18	3.12	1
科目6	20	3.56	1

* 「無回答」は除く

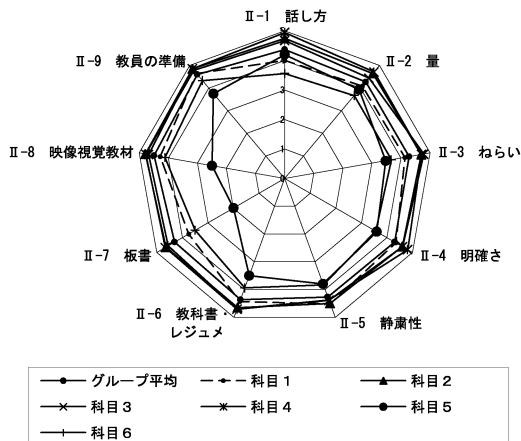
2) 平均値のレーダーチャート

(5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない)

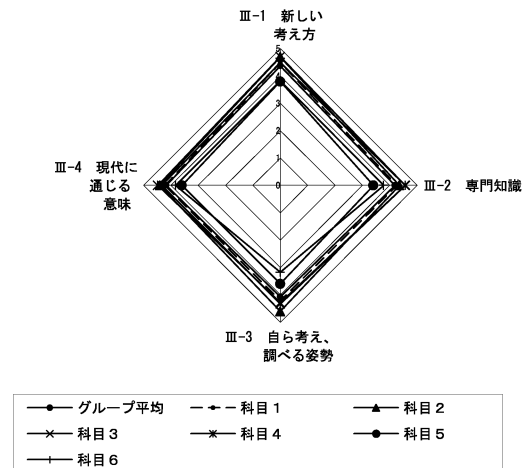
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



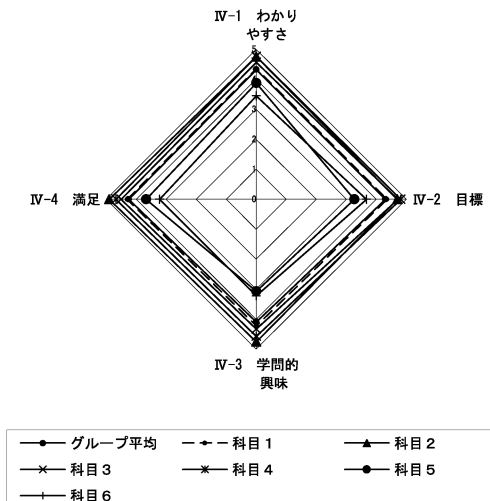
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（学生の意見に関する内容を含む）
4. 今後の改善に向けて

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2016年度は、学部等ごとに1教員1科目実施することになっていた。

文学部では、講義科目を中心として、演習科目を含む形で調査を行うこととした。1年次の必修科目等の導入教育にあたる科目、文学部基幹科目、各学科・専修で必要とされる科目など、科目の特性を見渡しながらか、各学科・専修ごとに対象科目を指定し、全体の状況を見据えながらか選定した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

アンケート実施科目数は合計254科目で、内訳としては春学期146、秋学期108科目であった。調査対象となった科目の総履修者数は18,686名で、そのうちの71.18%にあたる13,301名から回答があった。この回答率は全学部平均回答率の61.80%を大きく上回っており、全学部のなかでも3番目にあたる。文学部としては、過去の状況と同じく今回も高い回答率であり、学生の授業内容に対する関心が維持されていることを意味するものと考えられる。

学年別の回答者数をみると、1年生2,241名、2年生4,656名、3年生4,544名、4年生1,619名、不明が241名となっている。学科・専修ごとに科目を指定し、それぞれの動向を把握するというねらいにおおむね対応した分布になったといえるだろう。

I 「授業への取り組み方について」

文学部の出席率I1は91.92とあり、全学の平均よりはやや高い数値ではあるが、2015年度の92.51に比べると微減となった。I2「授業参加の積極性」が前年度の4.04から3.98へ、I6「授業時以外の学習時間」が前年度の1.02から0.98へと、わずかながら減少している。少なくとも一昨年来、微減の傾向が続いているようであり、等閑視できない動きであると認識している。「授業時以外での学習時間」の内訳としては、1時間未満と0時間という回答が約60%を占めている。昨年度同様、本年度も、教室規模が大きい授業の回答ほどこの数値が下がる傾向があることを確認できる。I3「履修準備」とI4「発展的な勉強をしたか」は、前年度から横ばいである。I5「シラバスの有効性」は3.75で、過去2年間の3.60、3.63と比べて0.1以上の増加がみとめられる。数年来取り組んでいる、シラバスの充実に向けた取り組みとの関係が想定される。

II 「授業の進め方」

II7「板書のしかた」を除く項目で4点台となっており、全体的に高い評価が与えられている。ただし、II7についても、昨年度が3.70であったことに照らせば、本年度の3.81という数値からは改善の効果が表れたことを読み取れるかもしれない。また、II8の数値4.24は昨年度と全く同じであった。文学部には、内容的に、たとえばパワーポイントだけでは構成できない内容の授業も少なからず存在するため（たとえば文学作品や史料の精読など）、教員側が工夫を求められることはもちろんながら、学生の側もさまざまな形態に対応する柔軟な対応力が求められていることは確認しておく必要があるだろう。II5「授業の静粛性」については、昨年度と同様、教室規模によって大きな差があらわれている。50名以下の教室で4.45、151名以上では3.78である。大規模調査を行った本年度の数値は、現在の授業現場の実態をあらわしたのものとして重く受け止める必要があるだろう。II9「教員の授業準備

の周到さ」では平均値 4.35 となっており、昨年度と同じく高いレベルが確保されていることが確認された。100 名以上の教室でも 4.33 となっており、教員の授業準備はおおむねしっかりと行われていると考えてよいだろう。

Ⅲ「授業から得たもの」

Ⅲ1「自分にとっての新しい考え方」とⅢ2「基本的な専門知識」はともに 4 点台となっており、相応の効果があがっているように思われる。ただし、Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」が 3.67、Ⅲ4「現代に通じる普遍的な意味」が 3.88 というのは、決して十分とはいえない状況と言わざるを得ない。昨年度の調査では順に 3.69、3.85 であったことに比しても、現状維持となっており、改善の効果はあまり表れていない。Ⅲ3 の数値は、やはり教室規模に対応して、大教室ほど大きく落ちこんでいく。とくに講義科目において、これらの事柄についての明確な意味づけや課題提示などを、さらに推し進めていく必要があるだろう。

Ⅳ「総合的評価」

各項目で 4 点台となっており、全体としてはある程度の水準が保たれていたと言えよう。ただし、この数値にも教室規模と対応した増減がみとめられる。とくに、Ⅳ3「学問的興味をかき立てられたか」、Ⅳ4「満足度」については、もう少し改善することを目標としたいところである。Ⅲの内容とも関わるが、教員側と学生側がそれぞれに授業に関して求めているものを確認しながら、試行錯誤していくことが求められよう。

Ⅴ「学部等による設問」

平均値からみると、教室規模・受講者数とも適切だったという回答が多く寄せられたと考えられる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が、学生の評価と向き合い、その内容を正面から受け止めて、今後の改善策をさぐることにつなげようとする姿勢を表明している。とくに、評価が低い項目については、そうした傾向が強い。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生の声が具体的に示されている所見票は少なく、それらを十分に読み取ることは難しいが、多くの教員が、寄せられた学生の声をていねいに聞き取り、今後の授業に活かそうとする姿勢をみせていることは確かである。具体的な希望が書きやすい項目ゆえ、各教員にはその内容が伝わったものとみえ、こうした傾向が 3-1 に比べてもいっそう強くなっている。

演習・講義といった授業種別を問わず、学生からのコメントに励まされたという旨の記述が少なからず見られ、大規模な教室での授業担当者でも、学生との意見交換を求める姿勢が保持されていることが読み取れる。これは、リアクションペーパーの活用とそれによる効果を指摘する所見が少なからずみられることとも対応しよう。

なお、履修人数が多すぎることに對する不便さが学生から指摘され、それについて改善を求める声が散見する。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員が、アンケートの結果を受けて、授業改善をめざした対応を行おうとしている。改善すべき点は、授業ごとに多様だが、オンライン授業支援システムの CHORUS や Blackboard の活用、授業時以外の課題のありかた、配付資料や提示資料の分量や方法、私語への対策などがあげられる。学生が満足できるような授業をめざしていくことはもちろんのことだが、一方で、大学の授業の「面白さ」とはどのようなことなのかを見つめ直すとする所見や、単に親しみやすいだけの安直な授業にならないように注意したいという所見もあったことを書き添えておきたい。

4. 今後の改善に向けて

2015 年度の時点では、授業時以外における学生の準備等をどのように定着させるか、また、それを踏まえて授業時に学生と教員、あるいは学生同士の双方向的なやりとりを確立していくかが、大きな課題として提示されていた。本年度、教員はそれぞれに授業の目的を示し、個々の内容を伝える努力を続けていたと考えられるが、自らの授業について、それぞれの学生自身の学びの段階とどのように関わり、また現代の社会を見つめ、そこで生きていくこととどのようにつながっているのかについて、なおいっそう意識的に語り続ける必要があるだろう。

自主学習を定着させることに向けた方策は、必ずしも明確になってはいない。授業ごとにさまざまな「温度差」があるのは当然のことで、学生はそれを感じながら複数の授業を履修している。したがって、個々の教員が独力で対応できること、実現できる改善策に限りのあることもまた事実であろう。

大規模教室での授業環境の改善については、継続して取り組むべき課題として残されたままである。昨年度に指摘されている全学的な方針を定めることも一案としつつ、学びの場としての大学の価値観、雰囲気、環境を育む努力を続ける必要があるだろう。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

学生側からの授業評価を通じて、今後の授業改善のための課題を各々の教員が認識することを主たる目的として、2016年度は概ね以下のような方針で科目を選定した。

- ・1教員1科目を原則に主要担当科目の春学期科目で実施する。
- ・1教員1科目を原則とするが、必修科目等を担当する場合は、複数科目で実施する。
- ・必修・選択必修科目は全科目・全クラス実施する。
- ・その他、グループ集計に用いる科目でも全クラス実施する。

また、必修・選択必修科目などの複数コマ開講されている科目、および積み上げ式の科目については全科目・全クラス実施し、グループ集計を行うことにした。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2016年度のアンケート実施科目数は163科目、回答者は延べ10,367名となった。履修者数と比した回答率は55.57%と全学平均(61.80%)より低いものであった。回答率が低かった要因の一つには、実施対象科目数が非常に多いことを背景とする学生の「回答疲れ」「回答慣れ」が考えられる。実際、科目数を絞った2015年度の回答率は74.16%であり、対象科目数が増えるにつれ、回答率も低下する傾向にある。

今回の集計結果では、ほとんどの項目で全学平均と比べると経済学部の平均値が低いものになっている。とくに「Ⅰ この授業へのあなたの取り組み方について…」の多くで平均値3.5を下回っている点、また「Ⅱ この授業の進め方は…」の項目で全学平均が軒並み4.0を超える平均値が出ているのに対し、本学部の平均値は3点台が並んでいることが特筆される。さらに、2013年度の調査では「Ⅰ この授業への…」に関する項目について全学平均を上回るものが多かったのに対し、今回のアンケートでは「Ⅰ6 授業時以外に学習した時間」を除くいずれの項目も全学平均を下回る結果となっており、学部全体としても一層の改善努力が必要であることを示している。

しかしながら、「Ⅰ1 出席率」「Ⅰ6 授業時以外の学習時間」および「Ⅴ 学部等による設問」を除く21の質問項目中17項目は3.5以上の平均値を示しており、さらに4.0に近い項目も多くみられることから、学部全体として特段に悪い評価を受けているわけではない。また、「Ⅴ 学部等による設問」の各設問を通じて、初年次教育も一定の成果を得ていることも付記しておきたい。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

前述の通り、授業の目的および内容にある程度の共通性があり、複数コマ展開されている科目および積み上げ式の1年次科目を中心に、学部の英語系科目、情報処理系関連科目、コース演習系科目、必修科目、基礎ゼミナール科目を抽出してグループ化し、集計を行った。基礎ゼミナールについては、担当者(専任・助教・兼任)別にグループ化したため、合計13のグループが形成された。

3-2 グループ集計の結果の概要

1) 1年次自動登録科目

「情報処理入門1」や「基礎ゼミナール1」などは、全般的に評価も高く、クラスによる極端な差異もあまりなかった。理由のひとつは、共通テキストの利用や定期的な担当者会議の開催を通じて授業情報および教員の感じた課題の共有化を行っていることにあると思われる。1年生が大学生活に着地するうえで重要な科目で一定の結果が得られたことをうけ、授業情報をいっそう緊密に共有し、授業水準を揃えていくような工夫を今後とも続けたい。

2) 必修科目

授業情報共有化が行われていない必修科目の「経済学1・2」、「経済原論A・B」、「簿記1・2」のうち、それ以前は通年科目であったものの2016年度カリキュラムから春学期・秋学期に分割された「経済学」「簿記」の評価をみると、「経済学」については1・2とも大きなばらつきがなく、共通シラバスの下でほぼ同じような評価を受けている。対して「簿記」は、その科目特性もあろうが、担当者ごとに大きなバラつきが生じており、次年度以降、改善の検討が必要であろう。

3) その他科目

少人数規模のクラス編成が功を奏していると考えられるのが、学部の英語系科目、情報処理関連科目、コース演習系科目である。これらは授業内容および人数規模が履修者のニーズに合致しているため、全般的な満足度の高さが各項目における高い評価につながっているものと思われる。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

担当教員の所見の記述量にはかなりの差異が見受けられる。とはいえ内容的には、板書、静粛性の確保、話し方（声の大きさ、スピード）およびレジュメなどの配布資料等について改善を求める学生からの指摘について、多くの教員が真摯に受け止め、改善に向けて努力する姿勢が示されている。一方、学生に対しては設問「I6 授業時以外に学習した時間」の少なさに対する懸念とそれを問題視するコメントも多く、課題も含めた工夫の必要性についても言及がみられた。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

記述は多様性に富むが、大まかに集約すれば、教員の説明（声の大きさ・スピード、例え話など）や配布・掲示教材がよい、という意見が多い。また、理解を深めるための小テストや課題などが有効であったとの評価も寄せられている。他方、話が回りくどい、メリハリがないといった否定的な意見に加え、授業の静粛性に関するコメントも多かった。

2) 上記1)に対する担当教員の所見のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」と同様、肯定的な評価に対してはそれをさらに改良していくことが記されているのに対し、否定的ないし改善を求める学生からの指摘については、多くの教員が真摯に受け止め、改善に向けて努力する姿勢を示している。ただし、

授業の内容を正確に伝えようとする際、受講者数が自らの目や手が届く範囲を大幅に上回ってしまっていることに苦慮し、試行錯誤される先生方のコメントも見られた。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

声の大きさや板書、見やすい資料の作成などの改善に加え、学生の積極的な授業への参加と意欲関心を引き出すためにアクティブ・ラーニングの要素を取り入れる必要を感じる教員も徐々に増えている点が特筆される。

5. 今後の改善に向けて

3年に一度の全教員対象アンケートをきっかけとして、各教員が突き付けられた課題に真摯に向かい合うことを期待したい。また、学部としても、評価の高かった共通シラバスを利用するような科目においては、可能な限り担当者会議の開催などを促して、情報共有できる場を作っていきたい。

なお教員の今後の方針にもみられた、アクティブ・ラーニングの要素を取り入れた講義を行おうとするのは、全体的な潮流ともいえる。しかし、現在の受講人数および教室配置に従えば、必ずしもそれが実現できるわけではないため、学部としてはもちろん、大学としてもその点を配慮・検討する必要があるだろう。

最後に、昨年度のアンケートでは、「授業時以外の学習時間の少なさ」の解消を課題として挙げたが、上述のように今回のアンケートでも引き続き課題となっていることが確認された。昨年度は、その改善策を考える上での手掛かりとして、「良い授業の経験を共有していきたい」としたが、それは一部の講義に限定されている状況である。とはいえ、既存のゼミナール系科目に加え、キャリア系科目として2016年度から設置された「課題解決演習」は、自ら調べて考えるための機会を与えるチャンスを広げられることから、その成果を学部で共有して講義科目での可能性を探る努力を行うとともに、学生をマスとして扱うのではなく、適切なフィードバックの実施を勧めることで学生個人が授業に参加している意識を高め、講義の予習・復習の動機付けとなるような授業が増えるよう模索していきたい。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

2016年度は、「1 教員 1 科目」という全学的方針を守りながら科目の選定を行った。これまで理学部では各学科とも、経年変化を調査するために、毎年度なるべく同じ科目を選定する方針で行ってきた。2016年度についても昨年度同様、数学科は2010年度より実施の新カリキュラムで新たに設けた必修科目・選択科目を、物理学科は原則として複数教員担当科目を除くすべての講義科目を、化学科は必修講義科目と複数教員担当科目を除く選択講義科目を、生命理学科は原則として複数教員担当科目を除くすべての講義科目から教員1名あたり複数科目にならないように科目を選定した。共通教育科目については、独自にアンケートを行うこともあり、例年通り非実施であった。また、理学部独自の設問についても、前年度を踏襲した。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

理学部の回答率は65.04%であり、全学平均(61.80%)より高かった。また、昨年度の回答率62.43%も上回った。学年ごとの回答者数は1年生1,405名、2年生1,472名、3年生1,175名、4年生307名であり、昨年度に比べると、1,3,4年生の回答者数が増加し、2年生の回答者数が減少した。

学生の授業への取り組み方についての集計結果を昨年度と比較すると、「(I1) 授業全体を通しての出席率」が微減となっている以外は、(I2) (I3) (I4) (I5) (I6) の各項目で増加している。授業の出席率は、一昨年度から微減の傾向が続いていることに注意すべきである。また、「(I6) 授業時以外に学習した時間」に関しては、「3時間以上」と回答した学生が約10%で昨年度より微増、「1時間未満・0時間」と答えた学生が約45%で昨年度より微減であった。一昨年度から引き続き、若干ではあるが改善の傾向が見られる。同時に、依然として授業に出席するだけで自ら学ぶことのない学生が大勢いることがうかがえる。

2015年度の(I)～(IV)の項目の集計データと比較すると、上述した(I1)と(II7)の微減、(II1)と(II5)が横ばい以外はすべての項目でポイントが上昇した。「(V) 学部等による設問」については、(V3)以外はポイントが上昇した。

学年別の比較では、「(I1) 授業全体への出席率」は1年生が高く(93.49%)、3年生、2年生、4年生と徐々に低くなっていった。全学では学年が上がるごとに出席率が低下しているのに対して、理学部では1年生の次に3年生の出席率が高かった。2015年度は2年生の出席率が最も高かったため、この学年の良い特徴かもしれない。(II)～(V)の項目では多くの項目で4年生のポイントが最も高く、次いで3年生のポイントが高くなった。これが全学での傾向と同じなのか、理学部固有の傾向なのかは不明である。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

理学部では、物理学科のみグループ集計を行った。春学期と秋学期の科目でグループ分けを行い、秋学期科目に関してはグループ分け科目数の上限を超えたために必修科目・選択科目の2つに分けた結果、全体で3グループに分けた。グループ分けは、「理学部全体では母集団が大きく、学科による属性もまちまちであり、全体での傾向を見るのではなく、物理学科の統計もあった方がよい」との判断で行った。

3-2 グループ集計の結果の概要

1) 春学期必修科目・選択科目（グループ1）

春学期科目の中では、必修科目・選択科目と各項目の回答に明確な相関は見られなかった。「医学概論」は、(Ⅲ1 自分にとって新しい考え方・発想) (Ⅳ3 学問的興味をかきたてられた) (Ⅳ4 この授業を受けて満足した) をはじめ多くの項目の平均がグループの中で最も高いことは特筆すべきである。

2) 秋学期必修科目（グループ2）

グループ2の科目の中では、配当学年と各項目の回答に明確な相関は見られなかった。「微分積分2」「量子力学2」の評価が全体的に高かった。

3) 秋学期選択科目（グループ3）

グループ2の科目の中では、配当学年と各項目の回答に明確な相関は見られなかった。「物理学特別講義1」「物理学特別講義2」の評価が全体的に高かった。

また、グループ間での比較を見てみると、(Ⅰ4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした) (Ⅲ1 自分にとって新しい考え方・発想) (Ⅲ3 自分で調べ、考える姿勢) の項目はグループ1から3の順に平均値が高くなっている。これは春学期と秋学期の違いではなく、配当年次の違い、またグループ1には必修科目と選択科目を含むのに対して、グループ2は必修科目、グループ3は選択科目であることを反映していると推測される。グループ2と3を比較すると、グループ3は選択科目であり、元々意欲の高い学生が受講していることを反映しているといえる。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

肯定的な評価を受けていると所見を述べている教員が多く見られたが、相変わらず授業時以外での学習時間の少なさに懸念を示す教員が多い。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

「肯定的評価として多い意見の集約」

授業が分かりやすい、解説が丁寧などの評価があった。レジュメ、資料の配付に関して多くの教員が肯定的な意見を得ていた。また、例題、演習問題、小テストなどの解説に関しても肯定的な意見があった。また、授業（演習）によっては、グループ編成を学力別編成に変えたことによる肯定的意見があった。

「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価としては、授業のスピードや話すスピード、板書のスピードが速い、授業内容過多などがあった。レジュメの誤植、板書のミス、文字の大きさ、汚さに対する否定的な意見もあった。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

講義ノートやレジュメの配付などを行っている教員にはそれが肯定的に受け止められていることがうかがえる。一方で、授業の特性上、板書が中心にならざるを得ない授業においても、学生がレジュメの配付などを求めているようである。また、学生の個人差であると考えられるが、授業が「易しい」「難しい」、板書が「遅い」「速い」など相反する評価があった。授業に対する積極性のなさに懸念を示す教員も少なからずいた。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多様な学生に対応するための授業内容の精選、板書、レジュメの改善、話すスピードの改善などが挙げられた。また、授業への学生の積極性、授業時以外での学習を促すために、課題や宿題を出すことなどが改善点として挙げられた。

5. 今後の改善に向けて

各教員は、昨年度の授業評価アンケートで受けた指摘を受けて、2016年度の授業で改善を行ったことが、教員の所見からうかがわれる。これは各教員の真摯な努力の表れである。多くの教員が、学生の積極性の無さ（授業に関する質問の少なさ、授業時以外での学習時間の少なさ）に懸念を示している。それに対して、課題や宿題を出すことを改善策に挙げている教員が多いが、これも学生にとっては積極的に、主体的に学習を行ったとは言い難い。特に理学部では自分で問題や課題を見出し、その答えを見出す必要があるので、学生がより授業に積極的に参加できる方法を今後も模索していく必要がある。その結果、授業評価アンケートの（I）の項目のポイントがより高くなっていくような努力を続ける必要がある。

4-4 社会学部

1. 科目選定方針とねらい

2012年度導入の現行カリキュラム下の、学部としての授業評価アンケート対象科目選定方針は以下の通りであり、2016年度は、前年度を踏襲した従来通りの選定を行った。

①必修科目はすべて実施する

②講義科目については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う

2012年度カリキュラムでは、従来学科別に行われていた初年次、2年次の必修科目を学部共通の必修科目と位置づけ、これまで以上に学部として基礎教育の充実を目指すことになった。そのため、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育のさらなる充実に向け重要である。①については、2011年度までは「必修・選択必修の講義科目は、原則としてすべて実施する」というやや緩やかな方針をとっていたが、基礎教育を重視するカリキュラム改訂の実施を踏まえて、2012年度からは必修科目は全て実施するという変更を行った。また、「1教員1科目」が、2016年度全学科目選定方針であるが、社会学部においては、②を2007年度以降選定方針としており、2016年度は講義科目について最低「1教員1科目」を選定し、実施した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 授業規模別

少ない授業規模ほど総じて評価が高くなるのは、社会学部に限らず、例年の傾向だが、50名以下を「S」、51~100名を「M」、101~150名を「L」、151名以上を「LL」とすると、本年度社会学部の結果を見ると、評価が $S > M > L > LL$ という単純な線形的関係にはなかった。Sは、「I6 授業時以外の学習時間」、「II5 静粛性」、「II6 教科書・レジュメ・参考文献が効果的」、「II7 板書の適切さ」の各項目で評価が高いが、それ以外の項目では、SとMとはほぼ同様であり、Mの方が若干上回っている項目も計8項目に及ぶ。平均が4点台の項目は、II9項目中Sが8、Mが7、III4項目中S、Mとも3、IV4項目中ほぼすべて（Mの「IV3 学問的興味の喚起」のみ3.99）と、100名以下のクラスはいずれも相対的に高い評価を得ている。

また、「I1 出席率」は、Sが88.8、Mが91.2、Lが92.4、LLが93.4と規模が大きくなるほど高く、「I2 授業への積極的参加」（3.85~3.91）、「I3 履修にあたっての十分な準備」（3.24~3.32）も、規模による違いは大きくない。むしろ、S、Mでこれら2項目はもう少し引き上げるための工夫が求められる。

但し、II、III、IVの各項目では、LLの評価がどうしても低くなる傾向は否めない。「II2 授業内容量の適切さ」、「II3 授業のねらいの明確さ」、「II4 授業内容の明確さ」、「IV1 わかりやすい授業だった」、「IV2 授業全体の目標の明確さ」の5項目はいずれも、Lまでは4点以上だが、LLのみ3点台（順に、3.89、3.84、3.85、3.77、3.81）であった。とくに、IVの総合評価は、S、M、Lの差がさほど大きくはなく、LLとの乖離が目につく。つまり、社会学部では、M、Lの規模でも相対的に評価の高い授業が展開されており、LL規模での授業における工夫が課題といえよう。

2-2 学年別

昨年度までと同様、「I1 授業出席率」は学年が進むにつれて低下している（1年 93.9、2年 93.3、3年 91.8、4年 84.6）。また、「I2 授業への積極的参加」（3.84～3.89）、「I3 履修にあたっての十分な準備」（3.21～3.35）は、学年による差が大きい。しかし、上記項目以外のいずれの項目も、学年が進むにつれて数字が高くなる傾向が見られる。これは、学年により、履修する授業の規模が異なることが一因としてあげられる。学年毎のアンケート回答授業の履修者数の平均を計算すると、1年 186名、2年 142名、3年 127名、4年 116名と、学年が上がるにしたがって、授業規模が小さくなる。前節で指摘したように、LL 規模はどうしても評価が低くなっており、学年による違いは、学習が進むことで大学の授業に対する適応力が増すと同時に、履修授業規模の違いも働いていると推測される。

2-3 学科別

昨年度と同様、全体としてメディア社会学科科目の数字が高く、社会学科科目、共通科目が相対的に低めの数字となっている。例えば、「IV4 授業満足」は、メディア社会学科 4.26、現代文化学科 3.98、社会学科 3.81、共通科目 3.79 であり、II、III、IV の設問で 4.00 を超えているのは、メディア社会学科が 13、現代文化学科が 7、社会学科、共通科目はともに 2 であった。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

例年と同様、授業の静粛性に関する記述は多く見られた。十分に対応しているとの評価も多く見られるとともに、大人数講義で苦慮する見解もあった。講義であっても、グループワークなど学生への主体的参加を促す試み、リアクションシート・コメントなどフィードバック機会の確保、映像資料、ゲストスピーカーの活用など、授業の工夫についての記述も多い。授業外での学習機会、発展的学習について、促す必要性の認識と具体的工夫の難しさが多く表明されていた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

所見票では、授業に対する積極的評価（配布資料、授業の仕方、視聴覚資料の活用などの工夫）、授業環境（静粛性、温度、調光など）について教員の対応を評価する見解と不十分であることの指摘の両面、授業の進め方の速さ（速すぎる場合の指摘）、展開される概念、議論のレベル（難しすぎる場合）、話し方（声の大きさ、スピード）についての要望などが多く見られた。

2) 上記 1) に対する担当教員の所見のまとめ

肯定的コメント、改善を求めるコメント、両者とも、積極的に受け止め、よりよくするために役立つ意向が強く表明されていた。授業の進め方や難易度については、多様な学生たちに一律に対応できないことへの難しさも言及されている。授業環境についても、あまりに厳しすぎると授業の雰囲気全体が固くなりすぎ、緩めると不満を感じる学生も多くなるため、調整が難しいことを認識した上で、積極的に取り組む姿勢が見られた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

3-1にあるような授業の工夫、配布資料の改善、授業内容の発展・刷新、発展的学習、授業外学習を促す工夫への取り組みの必要性、3-2にある授業環境改善への要望の対応などが多く見られた。

4. 今後の改善に向けて

改善すべき点は、例年のように、静粛かつ積極性のある授業環境を実現するために、大規模授業の減少に努めることである。2014年度から一部の大規模授業で他学部履修者の人数制限を行い、一定の効果があったと考えられるが、制限していない科目では依然として履修者が非常に多い科目が存在している。このため他学部履修者の人数制限を引き続き検討するとともに、開講曜日・時限などの熟慮を呼びかける。

2012年度カリキュラム改訂で導入した社会学原論、社会調査法、基礎演習などでは担当者会議を設置して、授業の運営や内容について日常的に検討する体制をとっているが、今後も継続的に授業運営および内容の改善に取り組んでいく。

4-5 法学部

1. 科目選定方針とねらい

法学部では、2011年度より、全教員（専任・兼任）について授業評価アンケートを行うのは3年に1回とし、それ以外の年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを行うことにした。

2016年度は、全教員（専任・兼任）につき授業評価アンケートを実施する年度に該当する。そこで、①講義科目については1教員1科目を対象とし、②演習科目は対象としない、との選定方針にもとづき、合計78科目につき授業評価アンケートを行った。大人数科目が多い法学部においては、講義科目における教育が容易ではないことに鑑み、これらの授業の改善を重視している一方、演習科目においては少人数を対象としておりアンケート調査が行いにくいという事情があるためである。

なお、毎年度の全教員についての授業評価アンケートの実施をとりやめたのは、授業評価アンケートも回を重ねるにつれて、アンケート結果に対して授業改善に取り組むという姿勢が浸透しているため、3年に1回のアンケートで、学生からの意見のフィードバックとしては十分であると考えられるためである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

集計データを参照し、回答率、設問項目別平均値、授業規模別平均値、学年別平均値、設問項目間の相関の結果についてまとめる。

回答率は、45.10%であり、全体の回答率 61.80%と比較して低い。これは、アンケート対象となっている講義科目では、出席が成績評価に反映されない場合が多いことから、授業の出席率が低くなっていることが原因であると考えられる。

設問項目別平均値においては、前年度に引き続き、Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」(4.07)が、高い値を示している。また、Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」(3.81)、Ⅱ4「各回の授業内容は明確だった」(3.85)、Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」(3.80)、Ⅱ5「十分な静肅性が保たれた」(3.93)も、同様に高い値であった。講義科目を対象としたアンケートにおいて、授業を通じて教員が学生に提供しようとした狙いが明確に伝わっていることがうかがえ、また、授業の準備が評価されていること、さらに静肅性が保たれているとされたことは、教員の努力や工夫の成果と評価できよう。

他方で例年と同様、Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(3.08)、Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(3.02)の値が低くなっている。さらにⅠ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」(0.99)は昨年度(0.82)より若干増加したものの、十分とは言えない値である。学生の受動的な学習態度がうかがわれる状況は、昨年度に比べて若干数値が改善したものの、大きな変化とは言い難く、大規模科目をアンケート対象としていることを考慮に入れたとしても、主体的な学習を促す取り組みが要請される状況は変わっていないようである。

授業規模別平均値であるが、多くの項目において、授業規模が大きくなるにつれて、平均値が下がっている。とくに151名以上の科目とそれ以下の科目を比べると、その平均値にはっきりとした差があることが見いだせる。他方で、50名以下、51～100名、101～150名以下では、平均値の下降傾向がそれほど顕著ではない。大人数科目、とくに151名以上

の科目において学生の理解や満足を高める努力が求められると同時に、科目の規模の抑制を課題におくべきことを示唆しているといえよう。

学年別平均値によれば、1年生が、他の学年と比較して、出席率が高い(92.71)一方、そのほかの多くの設問項目において低い値を付けていることが分かる。特に、Ⅱ7「板書のしかたが適切だった」、Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」における差が顕著であった。その原因としては、大学における履修・講義のスタイルへの適応が不十分であることが挙げられよう。

これに対して、学年が上がるにつれて、多くの設問項目において高い値を付けるようになる。大学の授業に慣れると同時に、満足を感じていることが分かる。一昨年度、昨年度は、3,4年生よりも、2年生がかなり高い値を付けていることが注目されたが、今年度にはそうした傾向は見いだせない。これについては、就職活動の時期の変化の影響が考えられる。

設問項目間の相関においては、総合評価(Ⅳ1「授業のわかりやすさ」、Ⅳ2「授業目標の明確さ」、Ⅳ4「授業の満足度」)は、Ⅱ1「聞きやすい話し方」、Ⅱ3「授業のねらいの明確さ」、Ⅱ4「授業内容の明確さ」と強い関連を示している。また、Ⅳ4「授業の満足度」は、Ⅰ授業への取り組み方、Ⅱ授業の進め方、Ⅲ授業から得たものと関連するとされており、満足度は何か一つの要素によって左右されるものではないとされた。

ただ、残念ながら、授業の満足度(Ⅳ4)と出席率(Ⅰ1)や授業時以外の学習時間(Ⅰ6)との関連は弱く、評価の高い授業が、学生の学習態度を積極的なものへと転換させる動機づけとしての機能を果たしているわけではない可能性もある。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

担当教員の所見では、多くの教員が、学生の率直な評価を真摯に受け止め、相対的にであれ評価の低い項目があった場合については、その原因を検討したうえで、次年度以降に改善を試みる姿勢を明らかにしている。

なお、Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」の値が低いことを問題視する教員が多く、改善の必要性を指摘するものが目立った。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見(記述による評価)の集約

学生の意見では、授業内容、レジュメ、板書等が分かりやすかったというコメントが多い。また、双方向型の授業やリアクション・ペーパー(メール)(とそれに対する教員からの回答)等、学生の意見を汲み取る方策について、肯定的なコメントが目立った。ゲストスピーカーや映像資料を用いた授業、授業において時事問題を紹介して授業内容と連結させる試みも、学生の興味をひいたようである。

他方、板書・レジュメ等について、より詳細さ・分かりやすさを求めるものが目立つよう見受けられた。また、授業における情報量の多さについてのコメントも散見された。授業中の静粛性に関する苦情のほか、マイクの音量や冷暖房の効きについて教室の大きさに由来する諸問題についての意見も一部で示されている。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

多くの教員が、学生からの肯定的評価を今後の授業の励みとし、批判的な評価や要望に対して真摯な回答を寄せている。

学生の関心を引きつけ集中力を維持するいくつかの試み（映像資料の活用、感想レポート、パワーポイントの使用等）に関しては、概ね学生から好評が寄せられているようであり、教員としても一定の手応えを感じているようである。

他方、授業で使用するレジюме等参考資料、パワーポイント、板書の分量・形式・内容等について様々な要望が寄せられていることに対して、興味深い所見として、パワーポイントや映像資料を多用することによって授業の満足度はあがるものの、科目に対する理解度（具体的には期末試験の出来）に必ずしも反映されていないことを指摘するものがあった。レジюмеをあえて簡潔にする、あるいは、レジюмеを配布しないことによって、自らのノートテキングを促す科目に対して、学生から否定的なコメントが多かったことに鑑みても、スライドや詳細なレジюмеを見て分かった気になることの危険性や、自らノートテキングを行うことによる理解の深化を促すという教員の狙いについて、学生に対して喚起する必要があるだろう。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員がアンケートの結果を踏まえて授業改善に向けた検討を行っている。内容は各教員が認識した課題に応じて様々であるが、一般的なブラッシュ・アップに加えて、①レジюмеや板書の内容・形式の改善（レジюмеや板書の意義、ノートテキングを確認することも含む）、②パワーポイントや映像資料の活用、③授業時以外の自習を促す（手助けする）取り組みの模索（ポータルサイトを用いた予習復習の課題指示等）、④私語等への対処方法の改善等が挙げられる。

4. 今後の改善に向けて

教員の所見票からは、大教室での講義の多い法学部において、授業評価アンケートが学生からの率直なフィードバックに基づいて授業内容をブラッシュ・アップする有益な機会であることが改めて感じられた。

3年ごとの全教員に対するアンケート調査であったが、全体の傾向は例年と同様であったことが確認できる。すなわち、全体としては授業内容につき一定の評価がされているものと思われるが、学生に主体的・積極的な学習を動機づけることについては課題が残るという状況である。前年度、当欄において、主体的・積極的な学習を動機づけるための方策に対する教員間での情報共有を課題として示した。これに対して、「基礎文献講読」の担当者会議を通じて、学生の動機づけに成果を挙げていると思われる取り組み（ベストプラクティス）について具体的に情報共有を行うとともに、兼任講師との打ち合わせの機会も積極的に活用し、これらを教授会にて報告・情報共有を行った。目に見える形で改善を示すことは必ずしも容易ではないが、来年度以降も、本総評を教授会メンバーで共有し、ベストプラクティスの収集および情報共有を継続し、学生の主体的・積極的な学習を動機づけられる授業の実現にむけて努めたい。

4-6 経営学部

1. 科目選定方針とねらい

経営学部は、2～4年次演習およびビジネス・リーダーシップ・プログラム（以下、BLP）・バイリンガル・ビジネスリーダー・プログラム（以下、BBL）関連科目を除いて、原則として、全科目を対象に、春学期 62 科目、秋学期 43 科目の合計 105 科目で授業評価アンケートを実施した。全科目を指定している理由は、「学生による授業評価アンケート」の結果は授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらし、授業の質を高めるのに寄与するものと考えているからである。なお、BLP および BBL 関連科目について実施しない理由は、これらの科目が演習系の科目であり、科目の独自性も強いので、大学所定のアンケートでは十分に実態を把握できないからである。学部でも独自に詳細なアンケートを実施していることから、これらの科目を除くことにした。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

学生側の授業に対する取り組みを示す 6 項目については、「授業全体を通じての出席率（I1）」の平均は 91.61、「この授業に積極的に参加した（I2）」は 3.91 とそれぞれ高い数値を示し、積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる。ただし、アンケート実施科目の回答率（回答者数/履修者数）で見ると 54.41%と低いことを考慮すれば、積極的に参加する学生とそうでない学生に差がある可能性が懸念される。

一方、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」（3.45）、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」（3.40）、「シラバスは受講に役立った（I5）」（3.49）、「授業時以外に学習した時間（I6）」（1.10）は、今年度も昨年度に比べ低くなっている。特に「授業時以外に学習した時間（I6）」では、6 割近くの学生が 1 時間未満と答えている。学生の授業への積極的な参加はみられるものの、予習・復習などへの意識は低い結果であった。予習・復習につながる課題の工夫が継続して必要である。

授業の進め方については、「板書のしかたが適切だった（II7）」の平均 3.71 が最低であり、他のすべての項目は 3.8 以上という結果であった。板書については、「該当しない」という回答が 5 割程度おり、パワーポイントなどのプレゼンテーションソフトウェアが使用されていることが要因だと考えられる。授業の進め方については、全体として学生から一定の評価を得ているといえよう。一番高かった「教員は授業の準備を周到に行っていた（II9）」については、4.24 という高い評価を得ている。学部として、現状に満足せず、今後も努力していく必要がある。

授業から得られたものを示す 4 項目については、いずれも 3.63 以上であった。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識（III2）」が最も高く 3.96 で、「自分で調べ、考える姿勢（III3）」が最も低く 3.63 であった。「自分で調べ、考える姿勢」については、数値自体は低くはないが、学年別にみると、学年が上がるにつれその数値も上がっている（1年 3.30、2年 3.67、3年 3.78、4年 3.85）、低学年ではまだ自学自習が十分ではないためではないかと推測できる。また、授業規模で見ると（50名以下 4.03、51～100名 3.58、101～150名 3.58、151名以上 3.57）、50名以下の授業で、より効果的に自分で調べ考える姿勢がついている。全体としてこの項目を高める工夫に加え、低学年への自学自習を促す工夫や受講生が多い授業での対策が必要であると考えられる。

総合的評価の4項目では、最も低い評価で「学問的興味をかきたてられた(IV3)」が3.83で、「授業全体の目標が明確だった(IV2)」が3.97と最も高い得点であった。総合的評価項目でも学年別にみると、学年が下がるほど数値が下がり、また、受講生の規模が大きくなるにつれ数値が下がった。決して低い評価ではないが、低学年の学生や受講生規模の大きい授業についての対応が必要と考えられる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

今回、経営学部では必修科目や自動登録科目である(BLP、BBLを除いた)「経営学入門」、「会計学入門」、「ビジネス概論A」、「ビジネス概論B」のクラスでグループ集計を行なった。これらの科目は複数教員による授業であり、結果・ノウハウを共有することで、より良い授業にしていく狙いがある。

3-2 グループ集計の結果の概要

「経営学入門」では、複数の項目で一つのクラスが突出して評価が良かった。例えば、「聞きやすい話し方だった(II1)」、「各回の授業のねらいは明確だった(II3)」、「わかりやすい授業だった(IV1)」などで平均4点を超えていた。他の項目では、大きな差はみられなかった。

「会計学入門」では、2名の教員がそれぞれ2クラスずつ担当した。基本的にはクラス間で大きな差はみられなかった。しかし、いくつかの項目で同じ教員によるクラスにも関わらず、学生の評価に大きな差がみられた。例えば、「わかりやすい授業だった(IV1)」、「授業全体の目標が明確だった(IV2)」、「この授業を受けて満足した(IV4)」の項目で差がみられた。

「ビジネス概論A」と「ビジネス概論B」のグループでは、それぞれクラス間で大きな差はみられなかった。全体的に良い評価を得られているが、教員同士で結果や要因を共有することで、より良い学習に繋がられるよう期待したい。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」については、総合評価が比較的高かったことに言及する回答が多くみられた。教員それぞれの低い点については、それに対する説明や対策など細く書いている所見もあった。また受講生数の多さに関する所見もあり、大学全体としての講義のあり方にも言及がなされている。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見(記述による評価)の集約

学生の「肯定的評価として多い意見」については、教員のスキルとして丁寧な説明、わかりやすい説明・授業の進行、授業の内容として練習問題の提供、明確な授業目的の設定、分かりやすい資料・補足資料の作成と提供、新しい視点の提供、様々な企業ケースを用いていること、フィードバックの活用、映像資料の活用、グループワークの活用、ゲストス

ピーカーの起用、具体例の活用、学生の自主性を重んじている点などが挙げられた。また、授業環境では教室内の静粛性が保たれていたことが肯定的に受けとめられていた。

学生の「否定的評価として多い意見」については、教員のスキルとして、話すスピードの速さ、何を言っているのか分かりづらい、声が小さい、マイクの使い方が悪いので声が小さい、話が脱線するなどが挙げられた。スライドや板書に関しては字の汚さ、小ささが挙げられている。またスライドの切り替えスピードが速くノートが取りづらい、スライドを Blackboard（オンライン授業システム）などで提供して欲しいなどの不満があった。また、英語の資料が使われることもあり、授業内では理解できないなどのコメントもあった。授業内容に関しては明確な目的がない、要点がわかりづらい、量が多い、難しすぎる、進行スピードが速いなどの意見があった。授業環境に関する意見では私語の多さとその対策についての意見が多かったが、発言しづらい雰囲気について言及する学生もいた。また、教員の遅刻に関するコメントも散見された。

2) 上記 1) に対する担当教員の所見のまとめ

「記述による評価に対する担当教員の所見」については、学生の記述が少ない中、肯定的評価の確認や否定的評価に対する改善の言及がなされていた。肯定的な評価については、わかりやすい授業であったことや授業の雰囲気が良かった、授業の資料が良かった点が挙げられ、その効果の確認がなされていた。また、「興味のある内容だった」などの学生の意見に対して、授業の継続的な向上を目指す意見も見られた。一方、否定的評価として、後ろの席における静粛性がなかったことやパワーポイントの進むペースが速いことに対して配慮する言及がみられた。また、学生側にもっとやる気や責任感を持って授業に望んでほしいというコメントもみられた。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

「改善に向けた今後の方針」については、授業進行（パワーポイントのスライド操作）のスピードが速いことや板書の汚さに対しての改善策の意見が出されていた。次に教室の静粛性についても多く言及がなされており、今後は厳しく取り締まるという意見があった。また、発展的な学習につなげたい、アクティブ・ラーニングの要素を取り入れたいというコメントも散見された。

5. 今後の改善に向けて

総合的評価をみると比較的高い評価を得ているといえるが、昨年度の値より低くなっている点は喜ばしくない。昨年度と同様であるが、学生側の授業に対する取り組みを示す 6 項目のうち、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた (I 3)」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした (I 4)」が相対的に低く、授業時以外での学習時間も決して高い値になってはいない。また授業から得られたものを示す 4 項目のうち「自分で調べ、考える姿勢 (III 3)」も相対的に低い。これらの値より、授業時には参加をするがそれ以外の時間では学問から離れてしまっている様子うかがえる。この点については、それぞれの講義の形式や受講生の多さがあり、全ての授業で一様に方法を論じることは難しいが、課題や宿題を与えることや事前にテキストを読ませるなどして講義への準備を促す工夫が

必要であろう。また、学生自身の主体的な学習姿勢にも期待したい部分もある。パワーポイントの活用やレジュメ・スライドを印刷した資料の配布は学習にとって効果的であるが、適度な分量、見やすさへの配慮、適度な進捗が必要と考えられる。映像資料の利用は学生の学習にとって効果的であると考えられるが、理解した気になりやすいので、定着のためには十分な理論的説明とバランスをとることに留意する必要がある。再度ここに言及するが、2016年度のアンケート結果は2015年度の値より低くなっていることが挙げられる(誤差の範囲かもしれないが)。総合的にみて高水準の教育ができている反面、改善がされていない面もあるので、来年度は授業の改善につながっていることを期待したい。

4-7 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

全学の方針に従い「1 教員 1 科目」とし、講義科目および一部の演習科目を対象とした。専門演習および言語科目を除く複数教員担当科目（基礎演習、Cultural Exchange、輪講科目）では実施しなかった。この選定方針のねらいは、各教員の授業改善という授業評価アンケートの主たる目的を達成するとともに、2016 年度より新たに導入された学部カリキュラムを検証することにある。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

実施状況としては、実施予定であった 82 科目（春学期 47、秋学期 35）に対し全科目（100%）で実施できた。回答率は 77.60%で、全学平均 61.80%を超える高水準となっている。

次に、設問項目別平均値について、各大項目別に述べる。まずは、授業への学生の取り組み（I 群）についてであるが、「出席率（I 1）」は平均値が 93.50%で全学平均の 90.97%を上回っている。「授業への積極的参加（I 2）」についても 4.13 と高めの数値が得られ、総じて多くの学生が授業に積極的に参加したことがわかる。他の項目についても、「授業時以外の学習時間（I 6）」を除き、すべての項目で学部間比較において首位を獲得している。しかし、回答割合の帯グラフを見る限りでは、「履修にあたっての準備（I 3）」と「発展的な勉強（I 4）」については、中間的（どちらともいえない）から否定的な回答をしている学生も多いという点に留意すべきであろう。「授業時以外の学習時間（I 6）」については、全学平均（0.93）を上回り 1.10 となっており、授業外での学習時間を確保している群に入っているが、帯グラフ結果によると 1 時間未満の学生数が最多であることから、今後検討すべき課題の一つと言える。授業規模別平均を見ると、概して授業規模による差異は顕著ではないが、「50 名以下」の科目が「出席率（I 1）」を除くすべての項目で最高値を出している。また、授業規模が大きくなるほど「授業時以外の学習時間（I 6）」が減少している傾向にあり、「101～150 名」の科目における授業時以外の学習時間（0.81）は全学平均（0.89）を下回っている。学年別に見た場合でも、概して学年による大きな差異は見られないが、「発展的な勉強（I 4）」については、3 年次生（3.71）が幾分突出しており、学年が上がるにつれて数値が高くなっていく全学平均の傾向と異なる側面を見せている。

授業の進め方（II 群）については、すべての項目で 5 段階評価の 4 点台を獲得しており、全体的に非常に高い評価を得ている。学部間比較でも「授業における静粛性（II 5）」と「効果的な教科書・レジュメ等（II 6）」以外の項目で首位を占めている。回答割合の帯グラフにおいても、「板書の適切さ（II 7）」（「該当しない」が最多）を除き、肯定的な評価が多いことがわかる。概して、内容・量ともに適切且つ明確な授業運営が実施できたと判断できる。授業規模別平均を見ると、すべての項目で「50 名以下」の科目が最も高い評価を得ている一方、「51～100 名」の科目は相対的に評価が低く、「効果的な映像視聴覚教材（II 8）」を除き、若干ではあるが全学平均を下回っている。50 名を超える科目における授業運営が今後の課題であると言えるだろう。また、「授業における静粛性（II 5）」は概して保たれている傾向にあるが、より徹底させていくことが検討課題の一つであろう。当該項目については、すべての規模の科目において全学平均を若干下回っており、この傾向は「51～100 名」の科目において顕著である。当該項目における学年別比較を見ると、1 年次生（3.92）

が相対的に静肅性に問題があるようだ。このことから、「51～100名」規模の科目における1年次生への静肅性保持の対応が望まれる。

授業から得ることができたもの(Ⅲ群)に関しては、4項目すべてにおいて学部間比較で首位を占めており、回答割合の帯グラフにおいても肯定的評価が非常に多いことがわかる。授業規模別および学年別でも全項目で全学平均を上回っている。しかし、「自分で調べ、考える姿勢(Ⅲ3)」は他の項目よりも数値が低く、「50名以下」の科目(4.07)では高い評価が出ているものの、今後の改善に向けた取り組みが必要であろう。特に、「101～150名」の科目(3.63)および1年次生(3.77)への対応が急がれる。

総合評価(Ⅳ群)に関する4項目はすべて4.15以上の高い評価となっており、「わかりやすい授業(Ⅳ1)」を除く全項目において学部間比較で首位を占めている。ただ、「51～100名」の科目は全項目で最も低い評価を得ており、この規模のクラスにおける授業運営の難しさが痛感される。一方、学年別では全項目で極端な差異は見られない。また、項目間相関の結果からは、総合評価と最も関連する項目はすべて「わかりやすさ」や「(目標・内容)明確さ」に関するもので、学生の高い理解度を達成することの重要性が示されている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「授業の目標が概ね達成できた」、「学生が満足できる授業ができた」、「学生は授業内容に興味を抱き、楽しんでいた」など、自らの授業の進め方に満足しているという旨のコメントが目立った。結論として、「授業運営には問題がなく、今後もこの方法で授業を実施していきたい」とする所見がかなりあった。また、学生の授業への取り組みについて、出席率の高さや積極的な授業参加に言及するコメントも多く、学生が新しい考え方・発想を身につけることができた点に満足している旨を強調する所見も散見された。一方で、授業時以外の学習時間が少ないことや授業をベースに発展的な学習ができていない点を指摘するコメントも多く、これに連動して、自分で調べ、考える姿勢を身につけさせるための工夫が必要であるという点が強調されていた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見(記述による評価)の集約

学生の肯定的意見で多かったものは、ゲストセッションやディスカッションを中心としたインタラクティブな授業運営に関するものである。また、アクティブ・ラーニングに代表される学生主体の授業や映像視覚教材の効果的な使用はかなり高い評価を集めている。これに対し、否定的意見としては、大人数クラスでの私語の多さを指摘する学生が多い。

2) 上記1)に対する担当教員の所見のまとめ

今後もゲストスピーカーの招聘や学生間のディスカッションを取り入れた活発な授業を展開していく必要性が強調されていた。また、取り組むべき最優先課題として、適切な授業外課題を提示していくことが肝要との所見が非常に多く見られた。さらに、映像視覚教材の更なる改善と、大人数クラスでの私語の減少に向けた努力が必要であるとの指摘が散見された。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

全体的に高い授業評価を受けた科目が多いことから、次年度以降も同様のアプローチをとりたいとする所見が多かった。特に、ディスカッションなどのインタラクティブな活動を促進できるような授業展開や、教材（映像視覚教材を含む）のコンテンツを今以上に充実させるなど、改善に向けた微調整をしながら現行シラバスの内容を継続して実践していきたいというコメントが目立った。また、学生の授業時以外の学習時間が少ないことに鑑み、授業外課題の量を増やす必要性を強調するとともに、学生の主体的な学びを促したいというコメントも多く見られた。

4. 今後の改善に向けて

2016年度から新カリキュラムが導入されたが、多くの科目が学生から高い評価を受けていることから、学生の知的満足度を満たす上で当該カリキュラムは十分に機能していると判断できる。新しい科目構成のもとに、担当教員は創意工夫を重ね、学生が積極的に参加できる授業環境の構築に努力してきたことが窺える。今後の課題としては、1) 授業外学習の促進、2) 発展的学習の促進、3) 自分で調べ、考える姿勢の育成、の3点が挙げられよう。1)については、これまでの授業評価アンケート報告書においても今後の改善点の一つとして指摘されてきた事項であり、長年に渡る継続課題であるが、今後は、量だけでなく、質の高い課題の提示も視野に入れる必要があるのではないかと。2)の発展的学習の促進のためには、学生の知的好奇心を刺激する授業を提供することは言うまでもない。3)は、1)と2)と連動しており、学生主体の学びの実現を目指す意図がある。これら3点における改善は、新カリキュラムの高い総合評価を長期に渡って維持していく上で必要であると同時に、学生に「大学での学び」を認識させる上でも重要な試みであると思われる。

なお、2013年度の「1教員1科目」による授業評価アンケート報告書における今後の課題として、「私語対策」と「視聴覚教材のより効果的な活用」に言及があった。私語対策については、概ね改善されていると判断できるが、50名を超える科目の一部においては未だに授業運営上の妨げとなっている点も事実であり、検討課題の一つになりうる。視聴覚教材の活用については、目覚ましい改善が確認できており、効果的な視聴覚教材が授業内容の明確化に繋がっていることは明らかである。さらなる改善を期待したい。

4-8 観光学部

1. 科目選定方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を設定した。

- (1) 全学の方針によって1教員1科目で実施する。
- (2) 演習、実験、実技を伴う科目は対象としない。
- (3) 複数教員担当科目は対象としない。
- (4) 集中講義は対象としない。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

集計データによる結果は、2015年度の実施科目数が10科目に限られていたため単純な比較はできないが、概ねの傾向は2015年度と似通ったものである。

授業の進め方に関する設問Ⅱ1～Ⅱ8（「該当しない」が約45%に達する設問Ⅱ7を除く）に対して約67%～78%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答、なかでも設問Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」に対しては、約86%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している。さらに、総合的な評価に関する設問Ⅳ1～Ⅳ4に対して約68%～75%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している。これらの結果から、学生が授業の進め方に関して高く評価しており、授業に概ね満足していることが読み取れる。

一方、授業への取り組み方に関する設問Ⅰのうち、設問Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」と設問Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」に対して、「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生は、いずれも40%台にとどまっている。このことは、設問Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」については、「0時間」または「1時間未満」と回答した学生が約2/3いることの反映であり、学生自身がこのことを自覚している様子が読み取れる。学生が授業時以外の学習時間を持たない、または確保できなくなっていることは、設問Ⅲ3「自分で調べ考える姿勢」に対して「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生が約55%に留まっている結果にも表れている。設問Ⅰ1「授業全体を通じての出席率」で、全体の約65%の学生が「90%以上」、約28%の学生が「70-89%」の出席率と回答していることから、まじめに授業に出席して専ら教室で学ぼうとする真摯な姿勢は見て取れるものの、73%以上の学生が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している設問Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」ならびに設問Ⅲ2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」を深めることができない状況が改めて提示されている。

学科別の結果（平均値）を比較すると、全体として観光学科に比べて交流文化学科の値が高い傾向がみられる。しかし、両学科のアンケート実施対象には、1科目あたりの回答者数が、観光学科113名：交流文化学科74名という授業規模の違いがある。授業規模別の平均値の結果を見ると、全学および観光学部ともに大規模化に応じて評価点が低下する特徴があり、両学科の差はこれが反映された結果である可能性は否定できない。なお、平均値において学部と全学の傾向はほぼ同等であった。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

設問 I 3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、設問 I 4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、設問 I 6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」が概ね低調であることを受けた所見が見受けられた。これらの課題は、上述のとおり全体に横たわる傾向ではあるものの、個々の授業から取り組むべき課題であるということもでき、多くの教員もこの点の認識を強く示している。ただし、授業時以外の学習等に関する評価の差は、実態としては課題を出す授業とそうでない授業の違い、さらには課題によってもその内容の違いを反映したところが大きいと考えられるのに対して、課題の有無や形態は授業の性格に応じて多様であるので、一律にこの点を問うことの意義については疑問も呈されている。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

昨年度までと同様、肯定的評価とされる記述の多くに「…わかりやすかった」、「…面白かった」、「…楽しかった」等の表現が頻出することは、学生が教室での授業に求める満足度と、教員が授業を通して学生に伝えようとしていることとの間に、意識のズレがある印象である。授業時以外の学習時間がほとんど確保できない学生の状況において、「わかりやすい」という意見を肯定的にのみ捉えて良いのかどうかについては依然として議論の余地がある。また全体としては肯定的評価も否定的評価も基本的にはテクニカルな内容が中心であり、参加型・対話型の授業、コメントペーパーへの対応、ゲストスピーカーの活用などについては総じて肯定的意見が多くみられる。

否定的評価とされる記述についても昨年度までと同様、内容・表現に粗雑なものも多く見受けられるとともに、教室で担当教員に直接申し出ることによって、その授業の実施中に改善または解決できる性質のものである（たとえば「声が聞き取りにくい」、「文字が小さい」、「パワーポイントのスピードが速い」など）。一方、教室の静粛性が保たれていない場合には、不規則な私語は周囲の学生の学習の権利を奪う行為であることを、教員が厳しく警告する必要がある。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

記述による評価への記載は分散的・個別的であったが、配布するレジュメや資料、また提示するスライド等において提供される情報量に関して、その分量の多寡や内容の精粗に関する評価が、学生の受け止め方と教員の考え方の間で一致していないケースが見受けられる中で、各教員の試行錯誤の様子がうかがえる所見が多い。こうした例に代表されるように、授業評価が、授業の質を保証することに一定の効果を発揮していることは所見から確認でき、記述による適切な評価は教員の励ましとなっている。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業評価と記述による評価をもとにした、きめ細やかな対応に向けた各教員の継続的取り組みの姿勢が読み取れる。そのような中で「わかりやすさ」を追求する学生の姿勢にど

こまで応じるべきかという問題とともに、記述による評価においては正反対の意見・要望があることから、授業の枠組み・位置づけ、配当年次、教室サイズ等に応じて、授業方法を柔軟に組み立てることもまた求められるようである。

4. 今後の改善に向けて

これまでも本欄では「授業時以外の学習時間を確保できるような意識と生活を身につけるよう誘導する」ため、「教えすぎない」「疑問を残す」など、時にはよい意味で「わかりにくい」テーマを取り入れる工夫について述べている。この点は、アンケートの最終項目にある「満足度」が本当に授業評価の指標として適切なのかどうかということともかわるが、これらの問題は教育の質を高めるための基本課題として引き続き実践と検証が求められるものと考えられる。近年の学生の気質とともに、学生を取り巻く社会状況の変化を考慮したとしても、授業に出席し、卒業に必要な単位を取得することのみでは、大学が伝えようとする学術研究の豊かさや深さを充分獲得できないことを、自習時間を含む単位制度の考え方とともに、繰り返し学生に伝えていく必要がある。

4-9 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

2016年度の科目選定の基準は、教員自身の選定を最重視しつつ、2015年度の評価を踏まえ以下の通りとした。(1) 1教員1科目以下の実施を原則とする、(2) 資格科目を優先する、(3) 演習科目は対象外とする、(4) 昨年度実施科目を優先する。この結果、延べ119科目においてアンケート調査が実施された。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 全体集計にみられる結果

○総合評価の「授業全体を通じての出席率」(I1)は、90.58%で全学平均90.97%とほぼ同レベルにあるが、「この授業に積極的に参加した」(I2)コミュニティ福祉学部(以下、コミ福)平均値3.97:全学平均値3.93(以下「平均値」を略)、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(I3)コミ福3.47:全学3.37、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(I4)コミ福3.34:全学3.27、「シラバスは受講に役立った」(I5)コミ福3.71:全学3.60と授業の内容面では全学平均を上回る結果となった。また「II 授業の進め方は...」(II1~9)、「III この授業から得ることができたもの」(III1~4)、「IV 総合的にみて、この授業は...」(IV1~4)の各項目すべてで全学平均を上回っており、これにより総合評価とも言える項目でも「わかりやすい授業だった」(IV1)コミ福4.03:全学3.97、「この授業を受けて満足した」(IV4)コミ福4.01:全学3.94と全学的には高い評価となった。

しかし、2015年度評価では「わかりやすい授業だった」(IV1)はコミ福4.04、「この授業に満足した」(IV4)もコミ福4.02であったことからすると僅かながら下がった。

その一方で昨年度の課題とされた、学生が自分から学び、考えるという主体的側面の涵養という面では、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(I4)は2015年度平均値3.29→2016年度3.34、授業から得たものとして「自分で調べ、考える姿勢」(III3)は2015年度平均値3.61→2016年度3.62と僅かではあるが改善が見られた。

なお、出席状況であるが、これを授業規模別で比較すると、「50名以下」89.16%、「51~100名」90.20%、「101~150名」90.87%、「151名以上」92.80%であり、2015年度と同様に大人数授業の方が少人数授業よりも出席状況が良好という結果となっている。この理由として、大人数授業の多くが必修科目や資格科目であり、またTA・SAやハンディ・ターミナルを使った出席管理が徹底されているため、学生も前提条件として義務的に出席しているが、一方で少人数授業はそうした出席管理の束縛が軽いと学生が意識しているのではないかと推測される。

しかし「わかりやすい授業だった」(IV1)では「50名以下」平均値4.22、「51~100名」4.03、「101~150名」3.96、「151名以上」4.06、「この授業を受けて満足した」(IV4)でも「50名以下」平均値4.17、「51~100名」4.01、「101~150名」3.93、「151名以上」4.06となっており、学生には少人数教育の方が高い評価になりやすい傾向がある。

このことから、コミュニティ福祉学部生の基本的傾向は、真面目で出席状況は良いが「学びの積極性」がやや希薄な面があると考えられ、このことは授業の理解度、満足度などは出席状況とは逆に、少人数授業が最も高く、受講人数が大きくなるほど逆比例して数値が下がることから裏付けられる。

○次に「Ⅱ 授業の進め方」において、大きく改善したものとして「十分な静肅性が保たれた」(Ⅱ5) 2014年度 3.99→2015年度 4.02→2016年度 4.08 があげられる。授業の静肅性維持については、2015年度の学部FD活動において授業中の私語への対策を学部として積極的に取り組み、それぞれの授業で様々な創意工夫がなされた成果と考えられる。

学生の授業中の私語に対し、学部教員が揃って問題意識を持って取り組んだことで全体として成果を上げることができた。

○また、「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的であった」(Ⅱ6) 2015年度 4.00→2016年度 4.02、「板書のしかたが適切であった」(Ⅱ7) 2015年度 3.70→2016年度 3.79、「映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった」(Ⅱ8) 2015年度 4.20→2016年度 4.23 など教員の側の努力が評価されていた。

○授業への学生の取り組みでは「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(Ⅰ3) 2015年度 3.41→2016年度 3.47、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(Ⅰ4) 2015年度 3.29→2016年度 3.34 と改善してきたものの、「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」(Ⅰ6) は全学平均 0.93 を下回る(コミ福) 0.91 で主体的な学びの姿勢をどう育むかが継続的な課題となっている。

2-2 学科等別集計にみられる結果

○福祉学科では、授業の量・内容と、専門知識を身につけられることに高い相関性が見られる。これは資格を取得して福祉援助職を指向する学生が少なくないことの反映と思われる。

○コミュニティ政策学科では、授業の量・内容と「新しい考え方・発想」に高い関連性が見られる。

○スポーツウエルネス学科では、授業のねらいと内容がマッチしているかに学生は大きな関心を持っており、専門知識の取得という面で評価していた。

○福祉学科とスポーツウエルネス学科では映像視覚教材への関心が高く、どちらも直接的な対人サービスを指向することから、具体的な映像による学習が効果的であると考えられる。

○3学科の傾向をまとめると授業の量や内容だけでなく、教員の準備や板書、視聴覚教材との関連性が高く、学生はその授業の「おもしろさ」と「深さ」に魅力を感じていることが窺われる。

○ここで専門関連科目に着目すると、「授業履修のために準備した」と「授業をきっかけに発展的な勉強をした」に高い相関性が見られることが特徴的である。これは学生が自分の問題意識をより専門的に高めたいという姿勢があるからであろう。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

①学部共通科目、②学科専門科目、③専門関連科目にて、全10グループを設定した。

回答者4名から約200名まで様々な授業を取り上げて、比較した。全体的な傾向は2-1で述べたものとはほぼ共通していた。それぞれのグループに着目すると、各グループ内の科目間の差違は大きく、グループ固有の特性は見られなかった。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

総合評価（Ⅳ）の結果を受け、「概ね妥当な評価である」とする記述が多かった。教員の多くからは高い出席率と静かな（熱心な）聴講態度を評価する声が多かった。その一方で、授業の準備（Ⅰ3）や「自分で調べ、考える姿勢」（Ⅲ3）が相対的に低い数値であることを指摘する教員も少なくない。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生から特に高く評価されていたのが、ゲストスピーカーにより現場の実際について「生の声」が聞けることがあげられており、次いでパワーポイントや映像教材の使用などが、肯定的な評価として記述されている。授業によっては学生を、小グループに分けて学生同士の議論、あるいは教員との対話をおこなっており、こうした双方向型の授業はかなりの好感をもたれている。そうした双方向性の確保の一つとして、リアクションペーパーの授業への反映も評価が高い。

そして、科目担当の教員の熱意や姿勢への学生の関心は高く、「熱く語る」教員は概して評価が高かった。

なお全般的に否定的な記述は少なく、授業内容が多すぎてついていけないといった授業の進め方についての意見があった。

継続的な問題となっていた学生の私語などの「教室の静粛性」については、昨年度からは減少しているが、学生の遅刻や途中退出についての指摘は引き続き見られた。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

○多くの教員から、一方的な「知識伝授型」の授業ではなく、学生と教員の双方向での「課題探求協働型」の授業を指向していることが示され、リアクションペーパーの活用や授業内でのワークの実施などの取り組みが述べられていた。

○映像教材の使用が効果的であることからその活用を促進したいという教員が多かった。

○「（出席確認が厳密で遅刻者に厳しいというが）遅刻する学生の側にも問題があるのではないか」などの問題点を指摘する意見もあった。

○抜本的な改善を求めるような学生からの否定的意見はほとんどなかったことから、多くの教員は、これまでの授業の進め方を、見直ししながら改善することとしている。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

基本的には、①より理解しやすい授業を目指す、②学生にとって新たな知的発見ができるようにする、③学生が主体的に学ぶようにする、という方向での教授法のさらなる改善を図ろうというものが多い。これを受け学びの関心を高めるため、現実社会の問題を積極的に捉えたり、視聴覚教材を活用したりすることが数多くあげられていた。またオンライン授業支援システム Blackboard や CHORUS などの活用、リアクションペーパーの活用で教員と学生の双方向のやりとりをきめ細やかにしたいという回答も多かった。

なお、授業の静粛性については、今後も改善するようにしたいという意見が多かった。

5. 今後の改善に向けて

○授業の静肅性については2-1で述べたとおり、教員全体で取り組んだことにより大きく改善することができたが、まだいくつかの授業では私語の多さを指摘する記述が見られた。

また少なくない教員から、「(教員の) 声が聞こえないという記述があるが、教室の後ろに座ろうという学生の姿勢にも問題があるのではないか」という意見が出されていたが、学生の意見の背景には授業の静肅性が維持できていないことも考えられることから、引き続き授業の静肅性の改善を図ることとしたい。

○授業で問題関心が啓発されながらも、それが具体的な学習に結びついていない(I6)ことから、学生が自分で関心を持った内容を掘り下げられるよう、文献検索の方法やフィールドワークにアクセスする方法などを提供するような試みが必要である。

○2016年4月から障害者差別解消法が施行され、大学としてしょうがい学生を受け入れるための合理的配慮が求められることとなった。本学部では、既に多くのしょうがい学生を迎え入れているが、それぞれの障害に対応した十分な支援を提供できているのか「手探り」の状態である。例えば、視覚障害の場合、文字は点字化できるが、図表は点字化することが難しく、特に専門科目では図表等を用いて説明することが多くなるため授業法をどうするのが問われている状況にある。しょうがい学生は今後とも増大すると考えられることから、機器などのハード面、支援ボランティアなどのソフト面に加えて、授業技術等についても検討が必要と思われる。

○2016年度からRIKKYO Learning Styleが導入されたが、今回の授業評価アンケートでは1年生と上級生で際だった違いはまだ見られない。(2015年度と比較しても有意の差は見られない)

RIKKYO Learning Style導入に伴い、各学科でカリキュラムが一部再編され、「学びの基礎」の形成や学部・学科のアイデンティティー醸成を図る取り組みが始められている。

今後の形成期・完成期に至ってその成果を評価することになるが、2017年度にはRIKKYO Learning Style初年度生が形成期を終え、2018年度にはRIKKYO Learning Styleで履修する学生が在学生の過半数を占めることから、適時効果測定しながらよりよいものにしてゆくことが求められる。

4-10 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

現代心理学部における2016年度の選定方針は、全学の科目選定方針である「1 教員 1 科目」に基づいて行った。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

集計データを参照すると、今回の回答率は67.12%で前年度から上がっており、大学全体の平均を上回る値となった。7割近い回答率であり、データとしての信頼度は従来通り確保されていると考えられる。学部における傾向を見ると、「I：授業への取り組み方」については、「I1：授業への出席率」が90%以上と回答した学生が6割を超え、70-89%と回答した学生を加えると昨年度と同様、9割以上を占めており、高い値であった。授業への積極的な参加に関しては、「I2：授業に積極的に参加した」の設問に対して「大いにそう思う」、「そう思う」と回答した学生が昨年度よりも上がり7割を超え、意欲的に取り組んでいる様子が見えかけた。しかしながら、「I3：授業への準備」、「I4：授業をきっかけにした発展的勉強」については、昨年度に引き続き低い値であった。授業内に限らず、授業を超えた自主的な学びを導くためには、授業外学習に具体的に関連付けた授業内の工夫が必要と思われる。学生の授業内容に対する評価に関しては、昨年度に引き続き「II8：映像視覚教材の効果的使用」と「II9：教員は授業の準備を周到に行っていた」が高い評価を受けている。逆に、評価が高くなかったのは、「II6：教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」と「II7：板書のしかた」であった。「II7：板書のしかた」に関しては「該当しない」との回答が5割を超えていたことから、多くの授業でパワーポイントの使用度が高くなっていることが読み取れるが、授業が予定調和的に進行し、目の前の学生の理解の状況や反応に即応しにくくなる懸念もある。パワーポイントを使用する場合、板書とのバランス等を考慮する必要があると思われる。また、パワーポイントを使用する場合にも、学生のさらなる学びに効果的な授業レジュメプリントの活用が求められる結果となった。「III：この授業から得ることができたもの」については、「III1：自分にとって新しい考え方・発想」、「III2：授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」についてが、昨年度と同様に得点が高く、授業を通じて、押さえるべき基礎的な知識および応用的、発展的な学びや発想の双方を学生が獲得できたと考えていることがわかる。ただし、「III3：自分で調べ、考える姿勢」が昨年度同様他の項目に比べて低い状況であり、これは、前述の「I4：授業をきっかけにした発展的勉強」の低さと連動しているのではないかと考えられる。加えて、学生が、自身が主体的に問題提起をするなり、自ら十分に思考するまでには至っていないようにも思われる。学生が受け身にならずに主体的な学びを促進するような工夫が授業に求められていると言える。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

担当教員の所見は、授業を行った側として、緻密で具体的な内容に基づく所見であった。学生の回答を受けて、今後、どのような工夫を行うことで、学生の意欲を引き出しながら、授業の効果を高めていくことができるかを具体的に検討するための作業についてのまとめであるような所見が多く、教員たちがこのアンケート結果を活かしていこうとする態勢が見受けられた。また、担当教員の所見を通して、学生の積極的な授業参加を促すために、授業中のワークや資料提示の仕方などについて、既にさまざまな工夫を行っていることが確認できる。概ね目標は達成された、予想通りの結果であった、というのが、「授業評価に対する担当教員の所見」の基調であったと考えられる。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生の意見では、ビデオなどの映像教材やパワーポイント、配布資料を活用した授業に対して、理解が進んだなどの肯定的な意見が多かった。しかしながら、上記のような視覚教材を用いれば良いというわけではなく、パワーポイントの構成によっては情報量が多すぎて重点がわからなくなるなど、学びの阻害になっていたとの改善要望も寄せられた。また、配布資料に関しては、予め目を通しておきたいのでオンライン授業支援システムの Blackboard にアップしてほしいという希望や、書き込みができるように余白を大きくしてほしいなど、学生が最大限自身の学びに活かそうとしている記述が目立った。学生が記入したリアクションペーパーに教員が返答をすることによって、学生は大人数の授業であってもインタラクションのある授業であると好意的に捉えていた。

一方、昨年度と同様、授業の環境面に対する否定的な意見が目についた。授業規模と教室サイズとのアンバランス、室温設定の不適切、静音環境が維持されていない、板書が見えにくい、といった意見である。また、四半期科目に対する意見としては、制度としてわかりにくいことや、週に2回であったり2時限続きであったりすることへの否定的意見が多かった。初年度ゆえに得られた意見なのかどうかの弁別が必要となるため、次年度以降の学生の意見と比較することが重要になると思われる。

2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

教員の所見は内容も具体的で細やかな内容にまで及ぶものも多くあり、学生からの指摘に対して、各々の教員がきちんと応答しつつ所見を述べている様子が見える。特に、視覚教材や配布資料、Blackboard などのウェブの効果的な活用、板書の工夫などについて各教員が具体的な改善案を述べていた。授業中の学生の反応やリアクションペーパーの内容などから、教員はある程度は授業の内容や運営に関してその都度、調整したり工夫を重ねたりしていくものだが、やはり授業評価アンケートを通じた学生の具体的な記述による指摘は、教員のそうした授業の質の向上意欲を高めるとともに、改善策に向けた取り組みを具体的に思考させ促していく動因として、重要な機能を果たしていると思われる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

それぞれの教員が、学生の指摘に対して、真摯に応答して具体策を述べる等していた。また、発展的学習やアクティブ・ラーニングなどの能動的学びを促す仕掛け、仕組みづくりに関して、改善方針を記す教員が多かった。集計データにみられる結果から見出される課題に対応し、各教員が今後の改善に向けて工夫をしていこうという姿勢が見受けられた。

4. 今後の改善に向けて

例年通り、学生は授業の出席率も高く、積極的な授業参加者も6割を超えて意欲的に取り組んでいるにも関わらず、授業内外での学生の主体的な学びを促進することや、授業を契機に発展的な学習を促す仕組みを構築することに関して課題を残す結果となった。本学部の様々な授業において、ゲストスピーカーの活用や、学生間および教員・学生間でのディスカッションを設ける、グループワークを取り入れるなどのアクティブな試みを行って授業運営がなされていることが所見票からわかった。このように各教員が科目に合わせた工夫を重ねて学生の学びを促進しようとする努力は、引き続き重要であることは確かと言える。そのことに加え、前年度にも今後の改善に向けての具体策として挙げられた、各教員が個別の授業を超えて、もしくはそれらを連携させて、関連授業間で相互参照しつつ講義をしたりする等、新たな工夫の検討についても、引き続き探っていきたいと考えている。

4-1-1 全学共通カリキュラム運営センター

1. 科目選定方針とねらい

2016年度の全学共通科目では、

- (1) 総合系科目「学びの精神 (FH)」(2016年度新設科目群)
- (2) 総合系科目「多彩な学び」の以下5カテゴリにおける講義系科目
(①人間の探求 (FA)、②社会への視点 (FB)、③芸術・文化への招待 (FC)、
④心身への着目 (FD)、⑤自然の理解 (FE))

を対象に1教員1科目、また、

- (3) 総合系科目「多彩な学び：⑥知識の現場 (FV)」におけるグローバル教育センターが提供する全科目

を対象に、授業評価アンケートを実施した。実施合計は327科目であった。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

全学共通科目の回答率は64.30%で、母数(履修者数)が39,514名と他学部よりも圧倒的に多いものの、全学平均(61.80%)より高い結果となった。学年ごとの回答者数については、1年生10,632名、2年生7,282名、3年生4,665名、4年生2,090名であり、学年が高くなるにつれて回答者が少ない傾向にある。

授業の取り組み方(I)についての結果を見ると、ほぼ昨年度と同様であったが、授業時以外の学習時間(I6)については、昨年度の0.78から0.82に増加している。さらに、これを全学共通科目の分野別で見ると、2016年度1年次入学者のみが履修対象となった「学びの精神」(1年次春学期に履修を推奨)についてはかなり少ないのに対して、「多彩な学び」科目群の多くは昨年度の平均値を上回る結果となっている。まだまだ不十分とはいえ、授業時以外の学習時間を増やそうという努力が少しずつ成果を見せ始めていることが看取される。授業の進め方(II)については、ほぼすべての項目で昨年度の平均値を大幅に下回る結果となっているが、これは、「学びの精神」における(II)の数値の低さに起因している。「学びの精神」のなかでは、教員の授業準備(II9)は4.27と高い評価を受けているので、教員の準備は十分でありながらも、学生がまだ高校の授業を受ける姿勢から脱却できておらず、内容の理解が十分には及ばなかったということが原因として考えられる。「多彩な学び」科目群だけを見れば、(II)の平均値は一部を除き昨年度と同様の傾向にあるため、授業の進め方が大きく悪化したという評価にはならないであろう。こうしたことは(III)(IV)のいずれについても当てはまる。「学びの精神」が新設され、その評価が新たに加えられたことで、全学共通科目の平均値が大きく変動しているため、来年度以降、平均値の取り方など工夫が必要と考えられる。

授業規模別の比較においては、(I)(II)(III)(IV)のいずれの項目においても、50名以下の授業で数値がかなり高い傾向が見られた。51名以上の3種の授業規模においては、相互にそれほど差は見られないが、それらの数値と50名以下の数値との間に大きな開きが見受けられる。小規模人数の授業において、受講生の理解度も満足度も高いということが分かる。また所見票からは、200名以上の授業では私語が見受けられ、静粛性を維持するために教員が苦勞している様子が確認される。これには、教員の希望があっても、適正規模の教室を配置できない施設の限界も関わるので、今後とも適正規模の教室配当に十分な

配慮が必要であることを明記しておきたい。

学年別平均の特徴としては、昨年度と同様に、出席率（I1）は学年が進むにしたがって数値が低下している。一方で、授業をきっかけに発展的な勉強をした（I4）の数値が学年の上昇につれて増加し、またそれに伴い、授業時以外に学習した時間（I6）も4年次生ではかなり増加している。その結果、授業の持つ現代に通じる普遍的な意味（III4）についての数値も学年とともに上昇していくことが確認できる。

3. 各カテゴリの総評

3-1 学びの精神（FH）

2016年度からはじまった1年次生対象の「学びの精神」は、立教大学での学びを理解してもらうために、①大学での講義を受講する包括的スキルを体得する、②大学における学習到達度チェックの仕組みを理解し、自ら主体的に学ぶ姿勢を涵養する、③立教大学生としての順調なスタートを助ける居場所感を醸成する、の3点を目的としている。これらの達成度については数年間の継続的な調査が必要になるので、今回は初年度として「学びの精神」が受講生にどのように受け入れられているのかについて評価してみたい。

授業時以外の学習時間（I6）は、0.68 とかなり低い。全学共通科目全体の結果（0.82）や1年次生の全学の結果（0.84）と比べても学習時間は少ないので、宿題などの工夫があってもよいのではないだろうか。

授業への満足度（IV4）は、3.82 と必ずしも高くない。「多彩な学び」科目群の結果（3.93～4.51）と比べても低いのは、1年次生の授業評価が厳しい傾向にあるためかもしれない。しかし、全学の1年次生の3.77と比較するとやや高いので、一定の評価は受けていると思われる。

高校と大学の学びの違いを感じた（V4）は4.05 と高い評価を受けているが、大学で学ぶ心構えができた（V5）はそれより0.33ほど低い。違いは分かったが心構えができたと言えないと感じている学生が多いことを示している。

IV4とV4、およびIV4とV5には比較的強い正の相関が見られた。授業への満足度が高いほど、大学での学びとは何かを理解できたと感じ、秋学期への自信につながっているようだ。1年次春学期に興味をもって授業を受講できた経験はその後の大学での勉学に一定の安心感を与えているのだろう。一方、満足できなかった受講経験は大学での学びに対する心構えが不安定なまま秋学期を迎えることになっているのかもしれない。

「学びの精神」1科目あたりの平均履修者数は、池袋キャンパスの春学期：108名、秋学期：79名、新座キャンパスの春学期：67名、秋学期：45名となっている。特に、新座で秋学期に開講された6科目のうち3科目が履修者数20名以下の演習系科目の様相を呈しており、担当教員も当初予定した授業計画の変更を余儀なくされたのではないだろうか。ただし、秋学期の「学びの精神」の履修者は春学期の不合格者が大半を占めていることを考えると、春学期の受け皿として秋学期のクラスサイズには余裕を持たせる必要はあるだろう。なお、GPA評点値で比較すると、春学期が2.30に対して秋学期は2.32とほぼ変わらない評価を受けているので、春学期の不合格者が多数を占めているからといって学力の差があるとは考えられない。しかし、期末試験の欠席率では春学期の5.8%に対して、秋学期は8.7%と高くなっているため、秋学期の履修者に対してはより細かな気配りが必要かもしれない。

3-2 多彩な学び

1) 人間の探究 (FA)

「人間の探究 (FA)」は、2015 年度の主題別 A「人間の探究」を引き継いでいるので、それとの比較で、アンケート結果を見ると、2015 年度はほぼすべての項目で全学共通科目の平均値を下回っていた (II) の設問群において、2016 年度は大きく改善し、ほぼすべての項目において平均と同じか、上回る結果となっている。個々の教員による改善努力が実を結んでいることの証左と受け取れよう。ただし「学びの精神 (FH)」において各項目の平均値が一様に低いことが、全体として平均値を引き下げている可能性もあるので、どの程度の改善が進んだのかは、個別のアンケート所見票などから読み解く必要がある。所見票によれば、詳細なレジュメやパワーポイントなどを利用し、板書の機会を削減することで、(II7) などで平均値が下がらぬよう配慮したことなどが読みとれる。こうした努力の反映であることは推測できよう。

また 2015 年度に散見された、100 名程度の講義での静粛性の保持が行き届かぬ事例は、2016 年度にはほとんど見当たらず、教員による努力が一定の成果を出していることが確認できる。一方で 200 名を超える受講生がいる講義では、一部で静粛性の維持が困難である様子も見取れる。所見票によれば、こうした科目において個々の教員が静粛性の保持に苦勞し、独自の努力を行っていることが読みとれるが、にも関わらず、2015 年度よりも学生の私語が目につくなどの感想もあり、改めて学生の実態がどう変化しているのかについて把握しておく必要がある。また慢性的な教室不足から、適正な教室規模についての教員側からの要望に応じられないケースにおいて、静粛性の維持が困難である例が見られることから、全学的な設備の拡充が今後も必要であることはいうまでもない。

新しい考え方・発想を得ることができた (III1) の平均値は、昨年度と比較しても高い評価が出ていると見られる。人文系科目が中心の「人間の探究」において、こうした評価が高いことは重要であり、教員にとっての励みともなっていることが、所見票からも確認できる。

2) 社会への視点 (FB)

「社会への視点 (FB)」は I~IV の設問でおおむね全学共通科目の平均を上回る結果となっており、担当教員による改善が見られる。微差ではあるが、「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった (II6)」、「映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった (II8)」は、全学共通科目の平均を下回っており、次年度の結果を注視する必要がある。2014 年度報告書で全学共通カリキュラムとしてコントロールできる対象と言及された「学部等による設問」(V) (教室の大きさ、受講者数、環境設備) については、2015 年度に改善したものの、2016 年度は全学共通科目平均を 3 項目とも下回る結果となっており、注視が必要な状況となっている。

一方、所見票を見ると、おおむね高い評価を受けており担当教員も満足しているとの記述が多い。具体的な内容をあげて授業改善に取り組む事項を示す教員も多く、周到的準備を進めている様子が見える。授業での資料配付、パワーポイントの使い方、分かりやすさと学問的アプローチの確保などの悩みも散見された。上記で記載した教科書・参考文献・視覚教材についての使い方に触れている記述も多く、アンケートのデータとともに所

見票でも注視することが必要であろう。大教室科目を中心に、私語、温度調節、教室と履修者の適正規模など、本カテゴリに限らない改善要望も出されており、引き続き、改善を図ることが求められる。なお、カリキュラム変更に伴い、新規に担当した教員の"戸惑い"の意見も散見されており、当該科目に関して継続的に見ていくことも重要である。

3) 芸術・文化への招待 (FC)

「芸術・文化への招待 (FC)」では授業の進め方 (II) や総合的な評価 (IV) の平均値が、いずれも全学共通科目の平均値より低く、「多彩な学び」のなかでも、最も低い評価となっている。2015 年度の評点のほとんどが全学共通科目の平均値を上回っていたことと比較すると大きな変化である。出席率 (I1) や授業への積極性 (I2) が他の科目群と比べてかなり低いことを踏まえると、受講生のやる気に左右されたアンケート結果とも考えることができ、担当教員の工夫が不足した結果とは言い切れない。一方で、講義を踏まえて発展的な勉強をした (I4) の項目は平均値を大きく上回っており、受講生が大きな刺激を受けたことが想定される。

所見票からは、他の言語に基づく文化のありようを受講生に理解してもらうため、教員が映像や音楽、写真などを多用したことがうかがえ、授業内容の充実に多大な努力を続けたことが分かる。特に映像資料の作成・準備に教員は多くの時間を割き、それを巧みに講義で利用したことが読みとれる。こうした努力は高く評価したい。ただ、映画や小説などの諸作品を利用する際に、その長さなどに左右されて、講義のたびごとに時間配分が異なったことなどに受講生が戸惑ったかもしれない。カリキュラムの改革に伴い新たに開講された科目も多く、今後の動向を注視したい。

また 2015 年度と同様に、ゲストスピーカーの重要性が確認できる。音楽関連の実演も含めて、ゲストスピーカーによる講義や実演、体験談などが受講生の理解を深め、受講生に好評だったことは、さまざまな所見票に共通する。担当教員もこうしたゲストスピーカーの利用に手応えを感じているので、今後ともゲストスピーカーの採用に予算措置し、その充実に努めていくことが求められよう。

4) 心身への着目 (FD)

「心身への着目 (FD)」は 30 科目でアンケートが実施され、2016 年度の回答者数は 3,365 名であった。授業への取り組み方 (I) の平均値は全学平均、全学共通科目平均と変わらない数値であったが、授業時以外に学習した時間 (I6) が 0.77 と低く、時間にして 1 時間程度となっている。授業の進め方 (II)、この授業から得ることができたもの (III)、総合評価 (IV) の評価は他の「多彩な学び」科目群より高く、全学平均、全学共通科目平均値を上回る数値となった。これらのことから「心身への着目 (FD)」は授業内容が適切で効果的に授業運営がなされていたことが分かり、「知識の現場 (FV)」と同様に高く評価されている。また、全学共通科目全体と「多彩な学び」のカテゴリ 1-5 は共通して授業の狙いと内容の明確さ、総合評価の分かりやすさ、授業目標の明確さとの間の相関係数が特に高いという結果であり、よく計画された授業になっていたことが分かる結果となっている。

一方で、授業時以外に学習した時間 (I6) について 2015 年度の 0.66 から若干改善は見られたものの、引き続き担当教員と情報を共有して授業以外の時間にも自主的に学習でき

るような仕組みづくりが求められる。このことは「学びの精神」の科目群にも表れていることから1年次からの対策が必要になると思われる。

5) 自然の理解 (FE)

「自然の理解 (FE)」における各設問の評点は、ほぼすべての項目で全学共通科目の平均を上回る結果となっている。

授業への取り組み (I) については、出席率が全学共通科目の平均をやや下回ったものの、その他は平均以上となっている。但し、(I2)～(I4)の評価は4以下であり、(I6)は1以下となっており、受講者の取り組みは決して満足すべきものではないように思われる。各教員のコメントから、基礎知識のばらつきの幅が大きい中で受講者の積極的な取り組みを促す試みが行われていることがうかがえるが、さらに工夫がなされることが期待される。

授業の進め方 (II) については、(II6)と(II7)を除いて4を上回っており、担当教員が周到な準備により授業を行っていることが示されている。なお、映像視覚教材の使用 (II8) についての評価が高い一方、板書のしかた (II7) についての評価は高くない。教員のコメントを見てもこの点には苦慮しているようである。

授業から得ることができたもの (III) については、どれも全学共通科目の平均よりも評価は高いものの、自分で調べ、考える姿勢 (III3) が若干弱いように見受けられる。これは、(I4)の評価が低いことと関連しているように思われるが、受講者に積極的な興味を持ってもらう工夫が必要であろう。

総合評価 (IV) を見ると、文科系分野の受講者の割合が多い中で総合的には良い評価が得られている。満足度も比較的高く、分野の違う受講者にも十分に意義のある授業が展開されている結果であろう。

なお、(V)については、教室の大きさや受講者数はおおむね適正と思われるが、コメントには黒板の大きさに対する不満もある。主に板書で進めていく授業に対する教室配当は配慮が必要かもしれない。

「自然の理解 (FE)」全体として、担当教員の工夫・努力により一定レベルのレベルで授業が展開されていることが分かるが、全学共通科目の授業においては、目先の評価に惑わされず、また単なる知識の伝達にとどまらず、教員の伝えたいメッセージを受講者にどのように伝えていくかが重要であると思われる。

6) 知識の現場 (FV)

「多彩な学び」のカテゴリ 1～5 と比べ、(I)は軒並み高い数値であり、学生の積極的な参加があったことが見て取れる。(II)についても教員側の周到な準備の跡がうかがわれ、また、(III)および(IV)における高い数値からも学生の満足度が高かったことが見て取れる。履修者数がおおむね20名前後、最も多い科目でも100名を下回っており、少人数科目での学生の満足度の高さが見て取れる。「知識の現場 (FV)」は、2015年度にはなかった項目であるため、翌年度以降の時系列的変化を注視したいが、これを超える数値は期待しにくいのではないと思われる。

次に、所見票の記述を通覧するに、教員が周到に準備をし、学生にかなりの負担を課す

ことがあらかじめ示され、それに学生が応え、学生からの高評価につながっている。このような傾向に教員側も満足している様子が見られる。一部にとどまるが、人数が少なすぎる場合は立教 GLP の特長である「リーダーシップ開発」が難しくなるのではないかという声や、日本人学生の発言が消極的だったなどの声も見られる。メディアセンターによる講義録画の早期実現も要望されている。

4. 今後の改善に向けて

教員の創意工夫が、多岐にわたってより一層進められていることは、所見票の内容から分かります。その結果として「多彩な学び」科目群の多くの項目で、昨年度とほぼ同様の数値を維持していることが確認できます。こうした努力は今後も続けられる必要があるでしょう。

ただし 2016 年度は、「多彩な学び」の一部でカテゴリの移動が行われ、なおかつ多くの科目が新設されたこと、また「学びの精神」というこれまでにはない特定の目的を持った科目が新設されたことによって、全学共通科目の多くの平均値が昨年度とは若干異なる傾向を示しているように思われる。たとえば「多彩な学び」のカテゴリ 6「知識の現場 (FV)」では、学生も積極的に参加し、教員も十分な準備を行った上で、少人数科目が実施されており、いずれの項目においても、平均値を大きく上回る高い評価が見受けられる。また、カテゴリ 3「芸術・文化への招待 (FC)」では、平均値が昨年度より大幅に下がっている。さらに「学びの精神」の平均値が、どの項目においても、「多彩な学び」と比較してかなり低くなっている。新カリキュラム導入の初年度であるので、こうした結果の背景やこれらが今後どのように推移するのか、十分に分析できない部分があることは否めない。2017 年度のアンケート結果が 2016 年度と比較してどのようになるのか、次に向けて、まずはそれを注視していく必要があるでしょう。

4-12 学校・社会教育講座

1. 科目選定方針とねらい

今年度は「1 教員 1 科目」の年ということで、対象外となっている専門演習、実験、集中や実技をともなう科目を除いて、教職、学芸員、司書の 3 課程では各教員が最低 1 科目について授業評価アンケートを実施した。実施科目は各課程の判断による。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

学校・社会教育講座（以下、講座）の調査対象科目は、合計で 71 科目（春学期 43、秋学期 28）である。履修者数は 3,072 名、延べ回答者数は教職課程 1,090 名、学芸員課程 275 名、司書課程 422 名、社会教育主事課程 3 名、また講座内の共通科目で 732 名の合計 2,522 名であり、回答率は 82.10%と高い数値になった。I 1（授業を通じての出席率）が 94.24%であり、それを反映して高い回答率となった。

設問項目別平均値を見るならば、I 6（この授業に関連して、授業時以外に学習した時間）を除いて、全学平均を上回った。II（この授業の進め方は…）群とIV（総合的にみて、この授業は…）群については、例年どおり、ほぼすべての項目が 4 を超える高評価となった。昨年度、長年の改善の課題であった II 7（板書のしかたが適切だった）が 4 を超えていたが、今年度は 3.98 となって、唯一 4 を下回る残念な結果となった。教員の継続的な努力が必要であると思われる。全質問中、3.5 を割ったのは、I（学生の授業への取り組み方）群の I 4（授業をきっかけにして発展的な勉強をした）3.43 である。これが、大学生の主体的な学習への取り組みそのものを問うようなものである点が気になる。これは、単純な平均値の比較ではあるが、学芸員課程と司書課程への回答が教職課程と比較して若干、低めになっており、両課程の教育の改善に参考となるかもしれないと考えられる。

3 課程で継続的に課題となっているのが、III（この授業から得ることができたもの）群の III 3（自分で調べ、考える姿勢）である。今年度は 3.75 となっており、これらも特に学芸員課程と司書課程で、教職課程と比較すると若干低めの値となっている。ただし、この背景には、講座は学部レベルでの専門的な基礎資格付与の課程として、「基本的な専門知識」の習得に焦点があてられているということがあるだろう。III 2（授業で扱った分野に関する基本的な専門知識）では 4.14 と、学部等間比較でも異文化コミュニケーション学部が続いて全学第 2 位の高い値になっていることからそれは明らかである。また、IV 4（この授業を受けて満足した）は 4.15 と、これも異文化コミュニケーション学部が続いて全学第 2 位で、「基本的な専門知識」の習得によって、学習の満足が得られている状況と推測される。しかし、このような講座の授業のあり方については、科目によっては、その段階で満足せず、さらに主体的に学習を進めるように学生たちを促す必要があると思われる。全学的には第 3 位ではあるが、I 4（授業をきっかけにして発展的な勉強をした）も 3.43 に留まっており、これももう少し、学生たちを促し、励ますことができるかもしれない。また、I 6（この授業に関連して、授業時以外に学習した時間）は、学部等間比較において下位の 0.86 に留まっている。授業の履修後につながる、学生の自主的・主体的な学びの習慣づけは、継続して課題である。

授業規模別平均値では、講座科目は 101～150 名規模が 1 科目のみ、151 名以上規模は 0 であり、議論しづらい。しかし、今年度の調査は、50 名以下の 52 科目、51～100 名の 18

科目で実施したが、I1（授業全体を通じての出席率）を除くすべての項目について、50名以下の小規模クラスが、51～100名の中規模クラスの得点を上回っており、授業規模が小さく抑えられることが教授・学習に概してよい影響を与えていることが明らかであった。講座の調査が全学と比較して平均値がすべて高い結果になっていることは、そもそも、クラス規模の影響もあると考えられる。

学年別延べ回答者数では、4年生の回答者が際立って少ない（90名）。これは講座の各課程のカリキュラムが学年が進むに従って、実習と結びつく演習的科目と実習科目そのものの履修が中心となり、それらの科目が本アンケートの対象科目から除外されていることも関係していると考えられる。II（この授業の進め方は…）以外の項目では学年が進行するとともに値が上昇する傾向がうかがわれた。満足度、学習への姿勢が学年が進行するとともに上がっていくと同時に、教員に対する評価は若干ではあるが厳しくなっていくということが表れている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

IV1（わかりやすい授業だった）の評価が高いことについての教員の所見が散見され、わかりやすさのために教員たちが努力している様子が見られる。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

板書、レジュメについて、その整理・改善についての要望が寄せられたことに対して、今後、工夫したいという回答が教員から提出されているのが散見され、これらは改善が期待できる。新規委嘱の教員からは、マイクの音量や教室の机の配置等の教室運営の基本的な管理についてこのアンケートではじめて学生の思いに気づいたという趣旨の所見があり、採用時に専任教員側から、講座の科目を履修している学生がそういった問題をなかなか指摘しづらいつと感じることがあると伝える必要があると思われた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

実技、演習、対話の形式を評価する意見が多いようで、学生の主体的な取り組みを授業時間中に促す工夫に教員たちは関心をもっていることがわかる。

4. 今後の改善に向けて

学生からの評価や指摘に対して妥当との所見を述べる教員がほとんどであり、アンケートが授業改善に活かされていく循環ができあがっていることがうかがわれる。授業評価アンケート記入のマナーは向上しているようで、教員に要望を適切な形で伝えることはできるようになっていると思われる。ただ、アンケート項目は学生自身の学びへの姿勢を問うものも多い。授業時間の中でも、アンケートでのふりかえりを見据えて、教員の側からも、自らの学びの姿勢をメタに見て、改善していくことを呼びかけるのもよい影響をもたらすかもしれない。

5. 2016年度のまとめと今後の展望

2017年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 河村 賢治

立教大学の「学生による授業評価アンケート」は、学生による授業評価と教員による応答・改善の仕組みを通じて授業の質を高めようとするものであり、本学における教育インフラの重要な一部となっている。こうした意義を持つ授業評価アンケートが2016年度も無事に実施され、報告書の作成に至ったのは、関係各位のご尽力によるものである。心より感謝の意を表したい。

1. 2016年度の実施状況

2016年度の「学生による授業評価アンケート」は、2009年度に教育改革推進会議において策定された「基本方針」に基づき、「1 教員 1 科目」の原則により実施した。

アンケートの実施科目数は春学期 893 科目、秋学期 678 科目、合計 1,571 科目であり、全学の実施率（実施科目数/実施予定科目数）は 98.86%、所見票提出率（所見票提出数/実施科目数）は 82.24%であった。

2. 大学全体の課題

各学部等の総評を読むと、それぞれの学部等や教員が創意工夫をして授業の質を高める努力をしていることが分かる。もっとも、「I3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」（全学平均値 3.37）、「I4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」（全学平均値 3.27）、「I6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」（全学平均値 0.93）、「III3 自分で調べ、考える姿勢」（全学平均値 3.55）などの項目については、満足できる結果にはなっていないと認識している学部等が多い。

そもそも大学設置基準においては、1単位の授業科目は授業前後の主体的な学修を含めて45時間の学修を要する内容で構成することが標準とされており、卒業要件は原則として4年以上の在学と124単位以上の単位修得であることを踏まえると、学期中の1日当たりの総学修時間は8時間程度であることが前提とされている（中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（平成24年8月28日）pp.11-12 参照）。また、立教大学は、「専門性に立つ教養人」を育成するために、以下のような4つの学士課程教育の目的を掲げ、これらを統合した教育を実践することを大学ウェブサイトで表明している。

立教大学 学士課程教育の目的

1. [知識] 専攻する学問領域の「知」の体系を批判的な検証をふまえたうえで理解し、専攻分野以外の学問領域に関しても幅広い知識を習得することが可能な教育。
2. [技能] 「知」を検証・獲得・活用するために必要な具体的なスキルを習得することが可能な教育。とくに、学習および生活の場面において、ICT ツール、日本語を含めた 3 つ

の言語なども用い、調べ、考え、まとめ、発表し、議論することができるようになるための教育。

3.〔態度〕 地球および地域社会の一市民として、高い公共性と倫理性を持ち、異なる文化・ジェンダー・しょうがい等に対して自らに内在している偏見に気づいて修正しつつ、異なる価値観を持った人たちと協働してプロジェクトを遂行できるようになる教育。

4.〔体験〕 インターンシップ、キャリア教育、ボランティア活動、クラブ・サークル活動、正課外教育プログラム、といった様々な学習体験・社会体験ができる学習機会の提供。

これらの点からしても、どのようにすれば学生の主体的な学びを促すことができるのかは、昨年と同様、大学全体の課題となっているように思われる。

この点、**文学部**の総評では、「授業時以外での学習時間」や「自分で調べ、考える姿勢」などの数値は、大教室ほど下がる傾向があり、「課題提示などを、さらに推し進めていく必要があるだろう」とされている。その上で、「自主学习を定着させることに向けた方策は、必ずしも明確になってはいない。授業ごとにさまざまな「温度差」があるのは当然のことで、学生はそれを感じながら複数の授業を履修している。したがって、個々の教員が独力で対応できること、実現できる改善策に限りがあることもまた事実であろう」とまとめられている。

経済学部の総評では、「授業時以外の学習時間の少なさ」の改善策として、「良い授業の経験を共有」することは「一部の講義に限定されている状況である」が、2016年度から設置された「課題解決演習」の「成果を学部で共有して講義科目での可能性を探る努力を行うとともに、学生をマスとして扱うのではなく、適切なフィードバックの実施を勧めることで学生個人が授業に参加している意識を高め、講義の予習・復習の動機付けとなるような授業が増えるよう模索していきたい」とされている。ただし、「アクティブ・ラーニングの要素を取り入れた講義」は、受講人数や教室配当の点から、「必ずしもそれが実現できるわけではない」との指摘もなされている。

理学部の総評では、「授業に出席するだけで自ら学ぶことのない学生が大勢いることがうかがえる」ところ、「学生の積極性の無さ（授業に関する質問の少なさ、授業時以外での学習時間の少なさ）」に対しては、「課題や宿題を出すことを改善策に挙げている教員が多いが、これも学生にとっては積極的に、主体的に学習を行ったとは言い難い。特に理学部では自分で問題や課題を見出し、その答えを見出す必要があるので、学生がより授業に積極的に参加できる方法を今後も模索していく必要がある」とされている。

社会学部の総評では、「I6 授業時以外学習時間」などの項目については50名以下のクラスの評価が高くなっていることに加え、授業評価アンケートのⅡ、Ⅲ、Ⅳの各項目についても150名以下のクラスはいずれも相対的に高い評価を得ているのに対し、151名以上のクラスの評価は低くなる傾向があること、また、比較的多くの項目について、学年が進むにつれて数字が高くなる傾向があるが、これは「学習が進むことで大学の授業に対する適応力が増すと同時に、履修授業規模の違いも働いていると推測される」との分析が示されている。改善点としては、他学部履修者の人数制限などを通じて、「静粛かつ積極性のある授業環境を実現するために、大規模授業の減少に努めること」などが挙げられている。

法学部の総評では、「主体的・積極的な学習を動機づけるための方策」として、「基礎文

献講読」の担当者会議を通じて、学生の動機づけに成果を挙げていると思われる取り組み（ベストプラクティス）について具体的に情報共有を行うとともに、兼任講師との打ち合わせの機会も積極的に活用し、これらを教授会にて報告・情報共有を行った」とあり、今後も「ベストプラクティスの収集および情報共有を継続」していくとされている。なお、151名以上の科目における学生の理解・満足度を高める努力が求められるとの指摘のほか、そもそも「授業の満足度（IV4）と出席率（I1）や授業時以外の学習時間（I6）との関連は弱く、評価の高い授業が、学生の学習態度を積極的なものへと転換させる動機づけとしての機能を果たしているわけではない可能性もある」との指摘もなされている。

経営学部の総評では、「授業時には参加をするがそれ以外の時間では学問から離れてしまっている様子がうかがえる。この点については、それぞれの講義の形式や受講生の多さがあり、全ての授業で一様に方法を論じることは難しいが、課題や宿題を与えることや事前にテキストを読ませるなどして講義への準備を促す工夫が必要であろう」とされている。なお、「自分で調べ、考える姿勢」については、学年が上がるにつれその数値も上がっているほか、50名以下の授業で、より効果的に自分で調べ考える姿勢がついていることから、「全体としてこの項目を高める工夫に加え、低学年への自学自習を促す工夫や受講生が多い授業での対策が必要である」との指摘もなされている。

異文化コミュニケーション学部の総評では、授業規模が大きくなるほど「授業時以外の学習時間（I6）」が減少している傾向にあることのほか、「自分で調べ、考える姿勢（III3）」については、50名以下の科目では高い評価が出ているが、101～150名の科目および1年次生への対応は急がれるとの指摘がある。今後の課題の総括としては、「1）授業外学習の促進、2）発展的学習の促進、3）自分で調べ、考える姿勢の育成」の3点が挙げられるとし、1）については、「今後は、量だけでなく、質の高い課題の提示も視野に入れる必要があるのではないか」、2）については、「学生の知的好奇心を刺激する授業を提供すること」、3）については、「1）と2）と連動しており、学生主体の学びの実現を目指す意図がある」とまとめられている。

観光学部の総評では、これまでも「授業時以外の学習時間を確保できるような意識と生活を身につけるよう誘導する」ため、「教えすぎない」「疑問を残す」など、時にはよい意味で「わかりにくい」テーマを取り入れる工夫について述べている」ところ、「この点は、アンケートの最終項目にある「満足度」が本当に授業評価の指標として適切なのかどうかということともかかわるが、これらの問題は教育の質を高めるための基本課題として引き続き実践と検証が求められる」（そもそも「授業時以外の学習時間がほとんど確保できない学生の状況において、「わかりやすい」という意見を肯定的にのみ捉えて良いのかどうかについては依然として議論の余地がある）」とされている。

コミュニティ福祉学部の総評では、専門関連科目においては、「授業履修のために準備した」と「授業をきっかけに発展的な勉強をした」との間に高い相関性が見られるところ、「これは学生が自分の問題意識をより専門的に高めたいという姿勢があるからであろう」との分析が示されている。しかし、「授業で問題関心が啓発されながらも、それが具体的な学習に結びついていない（I6）ことから、学生が自分で関心を持った内容を掘り下げられるよう、文献検索の方法やフィールドワークにアクセスする方法などを提供するような試みが必要である」とされている。

現代心理学部の総評では、「ゲストスピーカーの活用や、学生間および教員・学生間でのディスカッションを設ける、グループワークを取り入れるなどのアクティブな試み」が様々な授業において行われているところ、「このように各教員が科目に合わせた工夫を重ねて学生の学びを促進しようとする努力は、引き続き重要であることは確かと言える」とした上で、「各教員が個別の授業を超えて、もしくはそれらを連携させて、関連授業間で相互参照しつつ講義をしたりする等、新たな工夫の検討についても、引き続き探っていきたい」とされている。

全学共通カリキュラム運営センターの総評では、「授業をきっかけに発展的な勉強をした（I4）の数値が学年の上昇につれて増加し、またそれに伴い、授業時以外に学習した時間（I6）も4年次生ではかなり増加している」ところ、2016年度1年次入学者のみが対象となった「学びの精神」の授業時以外の学習時間はかなり少ないことから、「宿題などの工夫があってもよいのではないだろうか」との指摘がある。なお、授業評価アンケートのいずれの項目においても、50名以下の授業で数値がかなり高い傾向が見られたことや大人数教室での静粛性維持の観点から、「今後とも適正規模の教室配当に十分な配慮が必要であることを明記しておきたい」との指摘がある。

学校・社会教育講座の総評では、学生の自主的・主体的な学びの習慣づけは継続的な課題であるところ、「授業時間の中でも、アンケートでのふりかえりを見据えて、教員の側からも、自らの学びの姿勢をメタに見て、改善していくことを呼びかけるのもよい影響をもたらすかもしれない」とされている。なお、「自分で調べ、考える姿勢」について、「学芸員課程と司書課程で、教職課程と比較すると若干低めの値となっている。ただし、この背景には、講座は学部レベルでの専門的な基礎資格付与の課程として、「基本的な専門知識」の習得に焦点があてられているということがあるだろう」との分析がなされている。

このように、各学部等においては、授業の目的・形態・規模・学年等の違いを踏まえつつ、学生の主体的な学びを促すための方策が真摯に検討されている。昨年度の総評でも述べたが、こうした方策に関する情報を含めた授業改善につながる情報は全学的に共有していくことが望ましいであろう。

この点に関し参考になる他大事例として、青山学院大学が『青山学院大学FDハンドブック』という冊子を教員に配布していることが挙げられるかもしれない。青山学院大学のFDハンドブックでは、「1 授業の心構え」、「2 授業のデザイン」、「3 シラバスの作成」、「4 教材の選択・作成」、「5 最初の授業」、「6 多様な授業方法」、「7 授業の展開Ⅰ・Ⅱ」、「8 授業のアイデアⅠ・Ⅱ・Ⅲ」、「9 授業の秩序」、「10 学生とのインタラクション」、「11 学生への対応」、「12 ICT(情報コミュニケーション技術)の活用」、「13 試験と採点」、「14 授業評価の活用」、「15 授業改善のために」のテーマごとに、授業評価アンケートの質問項目と関連づける形で、授業改善のアイデアが示されている。例えば、授業のアイデアⅡとⅢの内容は次のとおりである。今後は本学においても、立教大学版の授業改善アイデア集を作成してみるのもよいのではないだろうか。

8 授業のアイデア II

学生が興味を持ってくれなければ、授業で期待された成果を上げることはできません。この項目では、学生が授業に興味を持つようにするために有用なアイデアを中心に紹介します。

単調な授業を避ける

- 学生の表情に目を向け、疲労を感じたら話のペースを変えたり、少し休憩をとるようにする。
- 授業の合間に余談を挟む。研究者としての体験談・失敗談などを紹介すると学生が学問に関心を持つ。
- 学期中にタイプの異なる授業（例えば、グループワーク）を取り入れ、授業のマンネリ化を防ぐ。
- 外部講師を招いて、教員と違った視点や考え方に触れさせる。
- 課題の種類も、いつも同じような課題にするのではなく、変化させる。学期中に2、3回は、それまでに学習した内容を要約させると良い。

学生に換言させる

授業の初めや終わりに、それまでの概要を学生に短く言い換えさせる。こうすることにより、学生の理解度を確認できる。

関連する授業アンケート設問

- ⑥ この授業の難易度はどうでしたか。
- ⑪ この授業に対する担当教員の熱意が感じられましたか。
- ⑬ この授業の内容は興味深いものでしたか。
- ⑱ この授業を履修して、自分のためになったことは何ですか。

FD Tips

「気が付いて 機関銃のような お話に 弾受けて私も 倒れてしまう」
「先生が自分の体験 話す時間 この授業でしか 知らない知識」

21

8 授業のアイデア III

一方的な授業を受け身の立場で聞いているだけでは、身に付くことは非常に限られています。学生が主体的に学習課題にかかわるように仕向けくことにより、学習成果があります。学生が能動的に学ぶように促す教育・学習方法の総称を「アクティブラーニング」と呼び、近年注目されています。

学生に考えさせよう

- 授業の中で問いを立てて学生と一緒に考える。
- 明確な正解のないテーマや学生自身の価値基準で判断する必要があるテーマを選ぶ。
- 一つのテーマについて複数の学説を紹介したり、同一の事件や事象に関する複数の見解を対比させ、多様な見方の存在に気付かせる。

学生に調べさせよう

- 学生が自分自身で調査したり考えたりする必要のある発表課題やレポート課題など、授業外学習を求める。
- ディスカッションのために、事前にテーマに関連する情報を学生に集めさせたり、参考資料を配布し有用な情報を書き出させたりしておく。

質問やディスカッションのテーマは明確に

- ディスカッションは、目的を説明し、議論すべきテーマを明確にする。
- 学生に質問する場合には、できる限り焦点を絞った質問を行う。「～についてどう考えるか」というような漠然とした質問はしない。

立場を変えて書かせよう

ある文章を指定し、学生にはそれとは反対の立場に身を置いて文章を書く課題を課す。

関連する授業アンケート設問

- ③ あなたは授業内容を理解するため積極的に取り組んだと思いますか。
- ④ 1回の授業につき、あなたは予習・復習を平均してどのくらいしましたか。
- ⑱ この授業を履修して、自分のためになったことは何ですか。

アクティブラーニングの例

- アクティブラーニングでは、書く・話すというアウトプットの活動を重視する。
- 知識の定着・確認を目的とする「一般的なアクティブラーニング」と知識の活用を目的とする「高次のアクティブラーニング」を区別し、目的を意識して授業に取り入れるとともに、両方を必要に応じて組み合わせる。
- 具体的には、ディスカッションやプレゼンテーションの他、小テスト、クイズ、コメントシートなど、大人数授業でも取り入れやすいもの、協同学習や協同学習と呼ばれる共同作業を組み込む学習、さらに PBL (Problem Based Learning / Project Based Learning)、ケースメソッド、シミュレーションゲーム、フィールドワーク、実験・実習・実技など、多種多様な方法・形態があり、それぞれの特徴を理解する必要がある。

アクティブラーニングの注意点

- 一概に講義を否定するのではなく、授業の目的や内容に応じて、アクティブラーニングと組み合わせながら、教育・学習効果を高めたい。
- 授業の教育・学習目標を明確にし、目標を達成するために適切なアクティブラーニングの方法・形態を選ぶ。
- アクティブラーニングを進めやすい教室環境、図書館等の施設設備、教員・教材、TA によるサポートなどを活用する。
- アクティブラーニングにおいては、双方向性を重視する。教員からのフィードバックや学生同士のコミュニケーションを通じて、学生のフレクション（振り返り）を促し、学習を深める。
- 最終的には、新しく学習する概念を既知知識や経験と関連づけ、知識構造に変化が生じるような「学習への深いアプローチ」を促すアクティブラーニングを進めていくことが望ましい。

22

注：青山学院大学全学 FD 委員会『青山学院大学 FD ハンドブック』（2017 年 pp.21-22）。なお、当該ハンドブックの実物をご覧になりたい方は、立教大学大学教育開発・支援センターまでご連絡ください。

最後に、法学部の総評における「授業の満足度（IV4）と出席率（I1）や授業時以外の学習時間（I6）との関連は弱く、評価の高い授業が、学生の学習態度を積極的なものへと転換させる動機付けとしての機能を果たしているわけではない可能性もある」との指摘や、観光学部の総評における「満足度」が本当に授業評価の指標として適切なのかどうかなどの指摘は、重要な指摘であると思われる。今後十分に検討する必要がある。

6. 2016 年度集計データ（資料編）

6-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 106,264 名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文	18,686	13,301	71.18
経済	18,657	10,367	55.57
理	6,807	4,427	65.04
社会	18,613	10,651	57.22
法	16,984	7,659	45.10
経営	15,230	8,286	54.41
異文化コミュニケーション	2,866	2,224	77.60
観光	11,678	8,091	69.28
コミュニティ福祉	12,367	8,316	67.24
現代心理	7,469	5,013	67.12
全学共通カリキュラム運営センター	39,514	25,407	64.30
学校・社会教育講座	3,072	2,522	82.10
合計	171,943	106,264	61.80

注1) 履修者数・回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注2) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	2,241	4,656	4,544	1,619	241	13,301
経済	3,182	2,934	2,742	1,326	183	10,367
理	1,405	1,472	1,175	307	68	4,427
社会	3,428	3,186	2,913	889	235	10,651
法	2,221	1,890	2,324	1,103	121	7,659
経営	2,374	2,193	2,221	1,052	446	8,286
異文化コミュニケーション	568	513	806	263	74	2,224
観光	1,892	2,613	2,505	970	111	8,091
コミュニティ福祉	1,802	2,874	2,655	842	143	8,316
現代心理	840	1,821	1,768	478	106	5,013
全学共通カリキュラム運営センター	10,632	7,282	4,665	2,090	738	25,407
学校・社会教育講座	843	888	628	90	73	2,522
合計	31,428	32,322	28,946	11,029	2,539	106,264

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は、当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 全学集計

表3 全学平均値

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	105,988	90.97	14.74
I 2 この授業に積極的に参加した	105,978	3.93	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	105,916	3.37	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	105,809	3.27	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	105,425	3.60	1.04
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	105,763	0.93	0.97
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	105,939	4.02	1.02
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	105,900	4.02	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	105,857	4.02	0.96
II 4 各回の授業内容は明確だった	105,767	4.05	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	105,710	4.04	1.03
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	104,887	3.95	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	62,486	3.71	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	87,925	4.13	0.96
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	103,632	4.27	0.85
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	105,816	3.92	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	105,788	3.91	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	105,770	3.55	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	105,647	3.81	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	105,756	3.97	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	105,735	4.00	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	105,741	3.86	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	105,728	3.94	1.02

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表4 設問項目別平均値 (学部等間比較)

全学および学部等別延べ回答者数およびアンケート実施科目数

学部等	全学	文	経済	理	社	法	経営	異文化	観光	現心	全学共通	講座
回答者数	106,264	13,301	10,367	4,427	10,651	7,659	8,286	2,224	8,091	5,013	25,407	2,522
科目数	1,571	254	163	97	115	78	105	82	83	77	327	71

注1) 下表の平均値は、科目数ではなく、該当科目の延べ回答者数により算出

学部間等比較

	全学	文	経済	理	社	法	経営	異文化	観光	コミ福	現心	全学共通	講座
I この授業へのあなたの取り組み方について...													
I1 授業全体を通じての出席率*1	90.97	91.92	89.10	92.73	92.32	84.34	91.61	93.50	91.33	90.58	90.89	91.63	94.24
I2 この授業に積極的に参加した	3.93	3.98	3.88	4.08	3.87	3.65	3.91	4.13	3.97	3.97	3.93	3.95	4.09
I3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.37	3.46	3.37	3.53	3.27	3.08	3.45	3.62	3.40	3.47	3.31	3.31	3.53
I4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.27	3.40	3.25	3.44	3.16	3.02	3.40	3.59	3.29	3.34	3.21	3.21	3.43
I5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	3.60	3.75	3.45	3.53	3.55	3.37	3.49	3.82	3.71	3.71	3.71	3.62	3.67
I6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間*2	0.93	0.98	1.09	1.31	0.81	0.99	1.10	1.10	0.86	0.91	0.75	0.82	0.86
II この授業の進め方は...													
II1 聞きやすい話し方だった	4.02	4.16	3.85	3.95	3.91	3.78	3.95	4.27	4.06	4.05	4.10	4.07	4.26
II2 各回の授業内容の量が適切だった	4.02	4.12	3.88	3.91	3.98	3.80	3.96	4.26	4.02	4.06	4.12	4.06	4.23
II3 各回の授業のねらいは明確だった	4.02	4.12	3.89	3.96	3.96	3.81	3.98	4.25	4.05	4.08	4.11	4.05	4.19
II4 各回の授業内容は明確だった	4.05	4.16	3.91	3.97	3.97	3.85	4.00	4.27	4.10	4.11	4.15	4.08	4.24
II5 十分な静粛性が保たれた	4.04	4.18	3.89	4.13	3.81	3.93	3.90	4.09	4.13	4.08	4.20	4.04	4.48
II6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3.95	4.09	3.83	4.00	3.86	3.72	3.85	4.19	3.99	4.02	4.02	3.96	4.25
II7 板書のしかたが適切だった	3.71	3.81	3.60	3.83	3.61	3.39	3.71	4.04	3.76	3.79	3.74	3.71	3.98
II8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	4.13	4.24	3.87	4.02	4.12	3.80	4.02	4.36	4.16	4.23	4.28	4.21	4.27
II9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.27	4.35	4.06	4.20	4.22	4.07	4.24	4.50	4.34	4.29	4.40	4.31	4.46
III この授業から得ることができたもの													
III1 自分にとって新しい考え方・発想	3.92	4.05	3.63	3.86	3.88	3.64	3.87	4.23	3.97	3.99	4.05	3.99	4.11
III2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3.91	4.02	3.75	3.94	3.83	3.74	3.96	4.15	3.98	3.97	3.99	3.88	4.14
III3 自分で調べ、考える姿勢	3.55	3.67	3.48	3.75	3.45	3.36	3.63	3.87	3.60	3.62	3.48	3.50	3.75
III4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3.81	3.88	3.65	3.66	3.83	3.66	3.80	4.04	3.87	3.91	3.80	3.83	3.98
IV 総合的にみて、この授業は...													
IV1 わかりやすい授業だった	3.97	4.09	3.79	3.87	3.91	3.77	3.88	4.22	4.01	4.03	4.04	4.01	4.23
IV2 授業全体の目標が明確だった	4.00	4.10	3.84	3.95	3.93	3.80	3.96	4.26	4.04	4.05	4.08	4.02	4.20
IV3 学問的興味をかきたてられた	3.86	4.01	3.66	3.79	3.80	3.63	3.83	4.15	3.90	3.91	3.94	3.89	4.00
IV4 この授業を受けて満足した	3.94	4.08	3.74	3.86	3.88	3.71	3.88	4.24	3.99	4.01	4.04	3.98	4.15

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大きいと思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表5 学年別平均値

学年別延べ回答者数

学年	1年	2年	3年	4年	合計
回答者数	31,428	32,322	28,946	11,029	103,725

注1) 学年は、当該学部で実施したアンケートに回答した学生の学年

学年別平均値 (全学)

設 問 項 目	1年	2年	3年	4年
I この授業へのあなたの取り組み方について…				
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	94.02	91.21	90.14	83.92
I 2 この授業に積極的に参加した	3.96	3.93	3.91	3.87
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.27	3.41	3.40	3.39
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.11	3.30	3.34	3.41
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	3.36	3.65	3.73	3.83
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	0.84	0.94	0.96	1.07
II この授業の進め方は…				
II 1 聞きやすい話し方だった	3.86	4.04	4.10	4.19
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3.87	4.04	4.09	4.17
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3.86	4.05	4.10	4.19
II 4 各回の授業内容は明確だった	3.89	4.08	4.12	4.22
II 5 十分な静粛性が保たれた	3.82	4.11	4.13	4.19
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3.85	3.98	4.00	4.07
II 7 板書のしかたが適切だった	3.55	3.75	3.77	3.84
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4.01	4.16	4.20	4.26
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.19	4.28	4.31	4.37
III この授業から得ることができたもの				
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3.78	3.94	3.99	4.08
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3.77	3.93	3.98	4.06
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3.40	3.57	3.62	3.72
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3.65	3.82	3.90	4.03
IV 総合的にみて、この授業は…				
IV 1 わかりやすい授業だった	3.80	4.00	4.04	4.15
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3.83	4.02	4.07	4.18
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3.68	3.88	3.94	4.08
IV 4 この授業を受けて満足した	3.77	3.97	4.02	4.15

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表6 授業規模別平均値

授業規模別延べ回答者数およびアンケート実施科目数

授業規模	50名以下	51～100名	101～150名	151名以上	合計
回答者数	17,825	31,190	23,959	33,290	106,264
科目数	770	436	195	170	1,571

注1) 授業規模は履修者数ではなく、実際の出席者数に近いと思われる回答者数を使用

下表の平均値は、授業規模別の科目数ではなく、該当科目の延べ回答者数により算出

授業規模別平均値（全学）

設 問 項 目	50名以下	51～100名	101～150名	151名以上
I この授業へのあなたの取り組み方について…				
I 1 授業全体を通じての出席率*1	91.23	90.37	90.39	91.81
I 2 この授業に積極的に参加した	4.06	3.91	3.86	3.91
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.54	3.35	3.31	3.33
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.52	3.26	3.21	3.19
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	3.70	3.62	3.59	3.55
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間*2	1.14	0.93	0.89	0.85
II この授業の進め方は…				
II 1 聞きやすい話し方だった	4.20	4.03	3.95	3.96
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4.15	4.02	3.97	3.98
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4.18	4.02	3.97	3.97
II 4 各回の授業内容は明確だった	4.23	4.05	4.00	3.99
II 5 十分な静粛性が保たれた	4.45	4.18	3.89	3.78
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4.14	3.98	3.90	3.87
II 7 板書のしかたが適切だった	3.91	3.73	3.63	3.61
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4.28	4.15	4.10	4.07
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.41	4.28	4.22	4.22
III この授業から得ることができたもの				
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4.11	3.91	3.88	3.86
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4.10	3.91	3.86	3.84
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3.83	3.55	3.48	3.47
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3.95	3.81	3.78	3.77
IV 総合的にみて、この授業は…				
IV 1 わかりやすい授業だった	4.13	3.96	3.92	3.92
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4.17	4.00	3.94	3.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4.05	3.85	3.81	3.80
IV 4 この授業を受けて満足した	4.14	3.94	3.90	3.88

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

6-3 学部等別平均値

表7 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	13,266	91.92	12.44
I 2 この授業に積極的に参加した	13,272	3.98	0.91
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	13,270	3.46	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	13,254	3.40	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	13,211	3.75	0.99
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	13,252	0.98	0.97
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	13,269	4.16	0.95
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	13,269	4.12	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	13,262	4.12	0.92
II 4 各回の授業内容は明確だった	13,254	4.16	0.91
II 5 十分な静粛性が保たれた	13,244	4.18	0.98
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	13,141	4.09	0.98
II 7 板書のしかたが適切だった	8,895	3.81	1.04
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	9,832	4.24	0.94
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	12,930	4.35	0.82
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	13,253	4.05	0.92
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	13,250	4.02	0.89
III 3 自分で調べ、考える姿勢	13,246	3.67	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	13,233	3.88	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	13,246	4.09	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	13,246	4.10	0.93
IV 3 学問的興味をかきたてられた	13,247	4.01	0.99
IV 4 この授業を受けて満足した	13,244	4.08	0.99
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	12,816	4.25	1.00
V 2 この授業の受講者数は適切だった	12,806	4.27	0.93

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表8 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	10,335	89.10	17.22
I 2 この授業に積極的に参加した	10,326	3.88	1.02
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	10,314	3.37	1.08
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	10,309	3.25	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	10,286	3.45	1.07
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	10,308	1.09	1.03
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	10,322	3.85	1.09
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	10,314	3.88	1.00
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	10,315	3.89	0.99
II 4 各回の授業内容は明確だった	10,303	3.91	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	10,284	3.89	1.09
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	10,234	3.83	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	7,447	3.60	1.09
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	7,753	3.87	1.03
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	10,089	4.06	0.93
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	10,300	3.63	1.00
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	10,301	3.75	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	10,291	3.48	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	10,286	3.65	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	10,296	3.79	1.08
IV 2 授業全体の目標が明確だった	10,291	3.84	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	10,293	3.66	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	10,292	3.74	1.06
V 学部等による設問			
V 1（全科目共通設問）教室の規模と設備は適切であった	7,654	4.17	0.94
V 2（基礎ゼミナール1）経済文献を読む力がついた	620	3.92	0.89
V 3（基礎ゼミナール1）レジュメやレポート作成の力がついた	618	4.17	0.81
V 4（情報処理系科目）表計算ソフト（Excel）の応用力が身についた	721	4.19	0.80
V 5（情報処理系科目）Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた	720	3.98	0.96
V 6（情報処理系科目）WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた	722	4.07	0.89

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表9 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	4,411	92.73	14.90
I 2 この授業に積極的に参加した	4,415	4.08	0.95
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,407	3.53	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,406	3.44	1.12
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,391	3.53	1.05
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	4,402	1.31	1.04
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,412	3.95	1.05
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,408	3.91	1.03
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,407	3.96	0.99
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,405	3.97	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,403	4.13	0.96
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,389	4.00	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	3,753	3.83	1.11
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,917	4.02	1.00
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,321	4.20	0.88
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,399	3.86	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,400	3.94	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,399	3.75	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,399	3.66	1.02
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,392	3.87	1.06
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,394	3.95	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,395	3.79	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	4,392	3.86	1.03
V 学部等による設問			
V 1 シラバスに沿って授業が行われた	4,323	4.01	0.88
V 2 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	4,312	4.06	0.92
V 3 (1年次春学期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた	641	3.60	1.11
V 4 (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった	2,748	3.86	1.08

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表10 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	10,625	92.32	13.35
I 2 この授業に積極的に参加した	10,617	3.87	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	10,618	3.27	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	10,601	3.16	1.08
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	10,565	3.55	1.03
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	10,600	0.81	0.92
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	10,612	3.91	1.06
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	10,609	3.98	0.94
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	10,605	3.96	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	10,596	3.97	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	10,586	3.81	1.16
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	10,504	3.86	1.01
II 7 板書のしかたが適切だった	5,215	3.61	1.03
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	9,328	4.12	0.94
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	10,405	4.22	0.85
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	10,601	3.88	0.95
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	10,593	3.83	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	10,596	3.45	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	10,573	3.83	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	10,593	3.91	1.03
IV 2 授業全体の目標が明確だった	10,591	3.93	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	10,594	3.80	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	10,592	3.88	1.02

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 1 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	7,640	84.34	21.42
I 2 この授業に積極的に参加した	7,643	3.65	1.12
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,628	3.08	1.09
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,625	3.02	1.13
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	7,585	3.37	1.11
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	7,625	0.99	0.96
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,635	3.78	1.19
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,625	3.80	1.06
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,623	3.81	1.07
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,619	3.85	1.06
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,618	3.93	1.12
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,579	3.72	1.13
II 7 板書のしかたが適切だった	5,389	3.39	1.16
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	5,398	3.80	1.10
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,459	4.07	0.96
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,619	3.64	1.04
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,615	3.74	1.01
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,615	3.36	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,601	3.66	1.03
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,614	3.77	1.13
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,611	3.80	1.07
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,614	3.63	1.12
IV 4 この授業を受けて満足した	7,611	3.71	1.12

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表12 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	8,258	91.61	14.55
I 2 この授業に積極的に参加した	8,254	3.91	0.99
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8,243	3.45	1.07
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	8,239	3.40	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	8,197	3.49	1.09
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	8,221	1.10	1.03
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	8,246	3.95	1.02
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	8,241	3.96	0.99
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	8,235	3.98	0.96
II 4 各回の授業内容は明確だった	8,234	4.00	0.96
II 5 十分な静粛性が保たれた	8,221	3.90	1.07
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	8,159	3.85	1.04
II 7 板書のしかたが適切だった	4,445	3.71	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	7,454	4.02	0.99
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	8,082	4.24	0.86
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	8,240	3.87	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	8,240	3.96	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	8,235	3.63	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	8,224	3.80	0.99
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	8,238	3.88	1.05
IV 2 授業全体の目標が明確だった	8,238	3.96	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	8,233	3.83	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	8,233	3.88	1.04
V 学部等による設問			
V 1 倫理観を持ち、自らの言動・価値観を批判的に振り返り行動できた	4,027	3.64	1.01
V 2 様々な文化背景・生活体験を有する人と、協力して作業できた	3,300	3.58	1.10
V 3 卒業後も継続して自律的・創造的に研究・調査できる自信がついた	3,966	3.50	1.05
V 4 経営学の知識や情報を取捨選択し、様々なプロジェクトに活用できた	3,974	3.58	1.02
V 5 課題を分析し、ビジネス・プロジェクトを論理的に立案し実行できた	3,503	3.55	1.06
V 6 (経営学科)ツールを活用し問題解決のためにリーダーシップを発揮できた	3,068	3.53	1.06
V 7 (国際経営学科)プレゼン、会議、交渉等を英語でも行うことができた	1,988	3.53	1.18

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) II 1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表13 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	2,220	93.50	10.83
I 2 この授業に積極的に参加した	2,219	4.13	0.86
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,218	3.62	0.98
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,214	3.59	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,203	3.82	1.01
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	2,214	1.10	0.99
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,218	4.27	0.92
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,217	4.26	0.84
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,215	4.25	0.88
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,211	4.27	0.86
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,214	4.09	1.02
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,198	4.19	0.94
II 7 板書のしかたが適切だった	1,122	4.04	1.01
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,952	4.36	0.86
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,166	4.50	0.74
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,216	4.23	0.88
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,216	4.15	0.88
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,216	3.87	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,213	4.04	0.93
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,216	4.22	0.91
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,216	4.26	0.89
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,217	4.15	0.95
IV 4 この授業を受けて満足した	2,215	4.24	0.92

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 4 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	8,083	91.33	13.62
I 2 この授業に積極的に参加した	8,076	3.97	0.90
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8,075	3.40	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	8,067	3.29	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	8,039	3.71	0.97
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	8,066	0.86	0.91
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	8,075	4.06	0.99
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	8,074	4.02	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	8,075	4.05	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	8,067	4.10	0.91
II 5 十分な静粛性が保たれた	8,061	4.13	0.92
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,989	3.99	0.98
II 7 板書のしかたが適切だった	4,365	3.76	1.05
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	6,837	4.16	0.92
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,929	4.34	0.79
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	8,071	3.97	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	8,068	3.98	0.88
III 3 自分で調べ、考える姿勢	8,068	3.60	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	8,061	3.87	0.94
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	8,063	4.01	0.98
IV 2 授業全体の目標が明確だった	8,060	4.04	0.93
IV 3 学問的興味をかきたてられた	8,061	3.90	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	8,061	3.99	0.97

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) II 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表15 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	8,295	90.58	13.94
I 2 この授業に積極的に参加した	8,299	3.97	0.90
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8,292	3.47	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	8,282	3.34	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	8,250	3.71	0.97
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	8,281	0.91	0.99
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	8,294	4.05	0.96
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	8,293	4.06	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	8,290	4.08	0.91
II 4 各回の授業内容は明確だった	8,288	4.11	0.89
II 5 十分な静粛性が保たれた	8,280	4.08	0.95
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	8,224	4.02	0.97
II 7 板書のしかたが適切だった	4,562	3.79	1.02
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	7,440	4.23	0.88
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	8,113	4.29	0.82
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	8,281	3.99	0.89
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	8,282	3.97	0.88
III 3 自分で調べ、考える姿勢	8,286	3.62	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	8,281	3.91	0.92
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	8,289	4.03	0.96
IV 2 授業全体の目標が明確だった	8,283	4.05	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	8,287	3.91	0.99
IV 4 この授業を受けて満足した	8,286	4.01	0.95

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表16 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	4,999	90.89	13.41
I 2 この授業に積極的に参加した	5,000	3.93	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,999	3.31	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,996	3.21	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,978	3.71	0.99
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	4,993	0.75	0.87
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	5,001	4.10	0.98
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	5,002	4.12	0.89
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,997	4.11	0.91
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,992	4.15	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,990	4.20	0.91
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,939	4.02	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	2,360	3.74	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4,401	4.28	0.87
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,909	4.40	0.75
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,998	4.05	0.92
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,995	3.99	0.89
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,996	3.48	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,989	3.80	0.99
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,995	4.04	1.00
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,996	4.08	0.91
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,997	3.94	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	4,997	4.04	0.98
V 学部等による設問			
V 1 この授業の受講者数は適切だった	4,845	4.21	0.86
V 2 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	4,841	4.27	0.85
V 3 現代心理学部の教育研究設備に満足している	4,829	4.05	0.90

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) II 1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I 6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表17 全学共通カリキュラム運営センター

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	25,338	91.63	13.71
I 2 この授業に積極的に参加した	25,344	3.95	0.94
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	25,334	3.31	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	25,304	3.21	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	25,218	3.62	1.05
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	25,290	0.82	0.95
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	25,338	4.07	0.99
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	25,332	4.06	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	25,316	4.05	0.96
II 4 各回の授業内容は明確だった	25,282	4.08	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	25,293	4.04	1.00
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	25,035	3.96	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	13,065	3.71	1.05
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	22,709	4.21	0.93
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	24,778	4.31	0.84
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	25,324	3.99	0.95
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	25,313	3.88	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	25,307	3.50	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25,275	3.83	0.99
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	25,300	4.01	1.01
IV 2 授業全体の目標が明確だった	25,297	4.02	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	25,293	3.89	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	25,292	3.98	1.02
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	22,893	4.10	1.05
V 2 この授業の受講者数は適切だった	22,681	4.09	0.98
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	22,571	4.15	0.94
V 4 【学びの精神のみ対象】この授業を通して高校と大学の学びの違いを感じた	5,899	4.05	0.99
V 5 【学びの精神のみ対象】この授業を通して大学の授業を受ける心構えができた	6,028	3.72	1.04
V 6 この授業の登録方法（次の中から選んでマークしてください）	—	—	—
⑤1次抽選登録 ④2次抽選登録 ③科目コード登録 ②その他 ①覚えていない			

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表18 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率* ₁	2,518	94.24	10.43
I 2 この授業に積極的に参加した	2,513	4.09	0.88
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,518	3.53	0.96
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,512	3.43	1.01
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,502	3.67	0.96
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* ₂	2,511	0.86	0.88
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,517	4.26	0.92
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,516	4.23	0.84
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,517	4.19	0.87
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,516	4.24	0.84
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,516	4.48	0.76
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,496	4.25	0.87
II 7 板書のしかたが適切だった	1,868	3.98	0.95
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,904	4.27	0.85
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,451	4.46	0.74
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,514	4.11	0.86
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,515	4.14	0.83
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,515	3.75	0.97
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,512	3.98	0.89
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,514	4.23	0.90
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,512	4.20	0.88
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,510	4.00	0.99
IV 4 この授業を受けて満足した	2,513	4.15	0.94

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

6-4 「グループ集計」科目一覧

表19 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期
4	基礎ゼミナール1	春学期
5	基礎ゼミナール1	春学期
6	基礎ゼミナール1	春学期
7	基礎ゼミナール1	春学期
8	基礎ゼミナール1	春学期
9	基礎ゼミナール1	春学期
10	基礎ゼミナール1	春学期
11	基礎ゼミナール1	春学期
12	基礎ゼミナール1	春学期
13	基礎ゼミナール1	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期
4	基礎ゼミナール1	春学期
5	基礎ゼミナール1	春学期
6	基礎ゼミナール1	春学期
7	基礎ゼミナール1	春学期
8	基礎ゼミナール1	春学期
9	基礎ゼミナール1	春学期
10	基礎ゼミナール1	春学期
11	基礎ゼミナール1	春学期
12	基礎ゼミナール1	春学期
13	基礎ゼミナール1	春学期
14	基礎ゼミナール1	春学期
15	基礎ゼミナール1	春学期
16	基礎ゼミナール1	春学期
17	基礎ゼミナール1	春学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	春学期
2	基礎ゼミナール1	春学期
3	基礎ゼミナール1	春学期

グループ4

No.	科目名	学期
1	情報処理入門1	春学期
2	情報処理入門1	春学期
3	情報処理入門1	春学期
4	情報処理入門1	春学期
5	情報処理入門1	春学期
6	情報処理入門1	春学期
7	情報処理入門1	春学期
8	情報処理入門1	春学期
9	情報処理入門1	春学期
10	情報処理入門1	春学期
11	情報処理入門1	春学期
12	情報処理入門1	春学期

グループ5

No.	科目名	学期
1	統計学1	春学期
2	統計学1	春学期

グループ6

No.	科目名	学期
1	経済情報処理A	春学期
2	経済情報処理A	春学期
3	政策情報処理A	春学期
4	財務情報処理A	春学期

グループ7

No.	科目名	学期
1	経済学1	春学期
2	経済学1	春学期
3	経済学1	春学期
4	経済学1	春学期

グループ8

No.	科目名	学期
1	簿記1	春学期
2	簿記1	春学期
3	簿記1	春学期
4	簿記1	春学期
5	上級簿記1	春学期
6	中級簿記1	春学期

グループ9

No.	科目名	学期
1	外書講読・英A	春学期
2	外書講読・英A	春学期
3	外書講読・英A	春学期
4	ビジネスパーソンの英語1	春学期
5	時事経済英語1	春学期

グループ10

No.	科目名	学期
1	経済学2	秋学期
2	経済学2	秋学期
3	経済学2	秋学期
4	経済学	秋学期
5	経済学2	秋学期

グループ11

No.	科目名	学期
1	簿記2	秋学期
2	簿記2	秋学期
3	簿記	秋学期
4	簿記2	秋学期
5	簿記2	秋学期

グループ12

No.	科目名	学期
1	経済原論A	秋学期
2	経済原論A	秋学期
3	経済原論A	秋学期
4	経済原論A	秋学期

グループ13

No.	科目名	学期
1	経済原論B	秋学期
2	経済原論B	秋学期
3	経済原論B	秋学期

表 2 0 理学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	現代物理学序論	春学期
2	力学1	春学期
3	電磁気学1	春学期
4	物理数学1	春学期
5	微分積分1	春学期
6	線形代数1	春学期
7	量子力学1	春学期
8	統計力学1	春学期
9	物理学概論	春学期
10	物性概論	春学期
11	情報処理	春学期
12	科学英語2(物)	春学期
13	化学(物)	春学期
14	生物学(物)	春学期
15	医学概論	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	力学2	秋学期
2	電磁気学2	秋学期
3	物理数学2	秋学期
4	微分積分2	秋学期
5	線形代数2	秋学期
6	波動と量子	秋学期
7	量子力学2	秋学期
8	統計力学2	秋学期
9	熱力学	秋学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	電気力学	秋学期
2	流体力学	秋学期
3	原子核概論	秋学期
4	宇宙物理概論	秋学期
5	エレクトロニクス	秋学期
6	物理計測論	秋学期
7	物理学特別講義1	秋学期
8	物理学特別講義2	秋学期
9	量子光学	秋学期
10	素粒子概論	秋学期
11	科学英語1(物)	秋学期

表 2 1 経営学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	経営学入門	春学期
2	経営学入門	春学期
3	経営学入門	春学期
4	経営学入門	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	会計学入門	春学期
2	会計学入門	春学期
3	会計学入門	春学期
4	会計学入門	春学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	ビジネス概論B	秋学期
2	ビジネス概論B	秋学期

グループ4

No.	科目名	学期
1	ビジネス概論A	秋学期
2	ビジネス概論A	秋学期
3	ビジネス概論A	秋学期

表 2 2 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	社会学1	春学期

グループ2

No.	科目名	学期
1	ヒューマンサービス英語入門B	春学期
2	ウエルネス福祉論	春学期
3	現代キリスト教人間学	春学期
4	福祉文化論	春学期
5	生涯スポーツ論	春学期
6	情報処理3	春学期
7	障害学入門	春学期
8	家族社会学	春学期
9	ライフサイクルの心理学	春学期
10	グリーンスタディ	春学期
11	社会福祉発達史1	春学期
12	公衆衛生学	春学期
13	リスクマネジメント論	春学期

グループ3

No.	科目名	学期
1	児童福祉論	春学期
2	福祉機器論	春学期
3	介護概論	春学期
4	公的扶助論	春学期
5	高齢者福祉論	春学期
6	地域福祉論1	春学期
7	福祉環境論	春学期
8	医療福祉論	春学期
9	精神保健福祉援助技術各論1	春学期
10	家族臨床心理学	春学期
11	社会福祉援助技術論2	春学期
12	社会福祉援助技術論4	春学期
13	福祉産業論	春学期
14	老年臨床心理学	春学期
15	精神保健学1	春学期

グループ4

No.	科目名	学期
1	国際NGO論	春学期
2	社会政策	春学期
3	経営組織論	春学期
4	健康政策	春学期
5	国際経済論	春学期
6	地方財政論	春学期
7	まちづくり論	春学期
8	質的リサーチ	春学期
9	ソーシャルサポート論	春学期
10	住宅政策	春学期
11	教育政策	春学期
12	災害心理学	春学期
13	多文化社会論	春学期
14	パートナーシップ論	春学期
15	NPO論	春学期

グループ5

No.	科目名	学期
1	生理学	春学期
2	身体文化論	春学期
3	コミュニティスポーツ論	春学期
4	小児保健・精神保健	春学期
5	スポーツ倫理学	春学期
6	バイオメカニクス	春学期
7	スポーツマネジメント論	春学期

グループ6

No.	科目名	学期
1	医学概論	春学期
2	精神障害者の生活支援システム	春学期
3	権利擁護と成年後見制度	春学期
4	介護保険論	春学期
5	福祉マネジメント論	春学期
6	精神科リハビリテーション学2	春学期

グループ7

No.	科目名	学期
1	法学2	秋学期
2	心理学2	秋学期
3	社会教育施設論2	秋学期
4	社会教育計画2	秋学期

グループ8

No.	科目名	学期
1	情報処理2	秋学期
2	キャリア形成論1	秋学期
3	キャリア形成論2	秋学期
4	コミュニティ福祉とキリスト教	秋学期
5	社会調査法	秋学期
6	人権論	秋学期
7	いのちの倫理学	秋学期
8	老年学	秋学期
9	人間心理の深層	秋学期
10	コミュニティ平和論	秋学期
11	家族心理学の基礎	秋学期
12	ファシリテーション論	秋学期
13	アジアの宗教と文化	秋学期

グループ9

No.	科目名	学期
1	家族福祉論	秋学期
2	発達障害論	秋学期
3	ソーシャルワーク論2	秋学期
4	心理学理論と心理的支援	秋学期
5	社会理論と社会システム	秋学期
6	障害者福祉論	秋学期
7	介護技術論	秋学期
8	精神医学2	秋学期
9	就労支援サービス	秋学期
10	障害幼児ソーシャルワーク論	秋学期
11	社会福祉援助技術論3	秋学期
12	社会保障論	秋学期
13	福祉情報論	秋学期
14	リハビリテーション論	秋学期
15	福祉学特論	秋学期
16	精神保健学2	秋学期
17	精神保健福祉援助技術各論2	秋学期
18	精神科リハビリテーション学1	秋学期

グループ10

No.	科目名	学期
1	家族政策	秋学期
2	政策学の基礎知識	秋学期
3	文化政策	秋学期
4	逸脱と紛争の修復	秋学期
5	エスニシティ論	秋学期
6	余暇生活論	秋学期
7	リーダーシップ論	秋学期
8	生命倫理政策入門	秋学期
9	社会問題の社会学	秋学期
10	行政学	秋学期
11	雇用と福祉	秋学期
12	障害者スポーツ論	秋学期
13	データ分析法	秋学期

グループ11

No.	科目名	学期
1	ウエルネス科学総論	秋学期
2	運動生理学	秋学期
3	スポーツ科学総論	秋学期
4	運動方法学	秋学期
5	アダプテッドスポーツ論	秋学期
6	ウエルネススポーツ医学	秋学期
7	スポーツコーチ学	秋学期
8	スポーツ社会学	秋学期
9	ストレングス・コンディショニング論	秋学期
10	ウエルネスプロモーション論	秋学期
11	レクリエーション援助論	秋学期
12	メンタルマネジメント	秋学期
13	スポーツビジネス論	秋学期
14	スポーツジャーナリズム	秋学期

大学教育開発・支援センター（2017年9月現在）

センター長 原 田 久（副総長、法学部）

教学 IR 部会

部会長 一ノ瀬 大 輔（経済学部）
井 川 充 雄（教務部長、社会学部）
松 本 康（社会学部長）
都 築 誉 史（現代心理学部）
林 英 明（教務部 全学共通カリキュラム事務室）
事務局 遠 藤 裕 子（総長室 教学改革課）
佐 藤 百 恵（総長室 教学改革課）

2016年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長 河 村 賢 治（教務部副部長、法務研究科）
遠 藤 裕 子（総長室 教学改革課）
佐 藤 百 恵（総長室 教学改革課）
大 澤 敏 彦（教務部 教務事務センター）
佐 野 美奈子（新座キャンパス事務部 教務課）

2017年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長 河 村 賢 治（教務部副部長、法務研究科）
遠 藤 裕 子（総長室 教学改革課）
佐 藤 百 恵（総長室 教学改革課）
伊 藤 明（教務部 教務事務センター）
椿 ま り（教務部 教務事務センター）

2016年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2017年9月発行

編集 立教大学 2017年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>

e-mail cdshe@rikkyo.ac.jp

